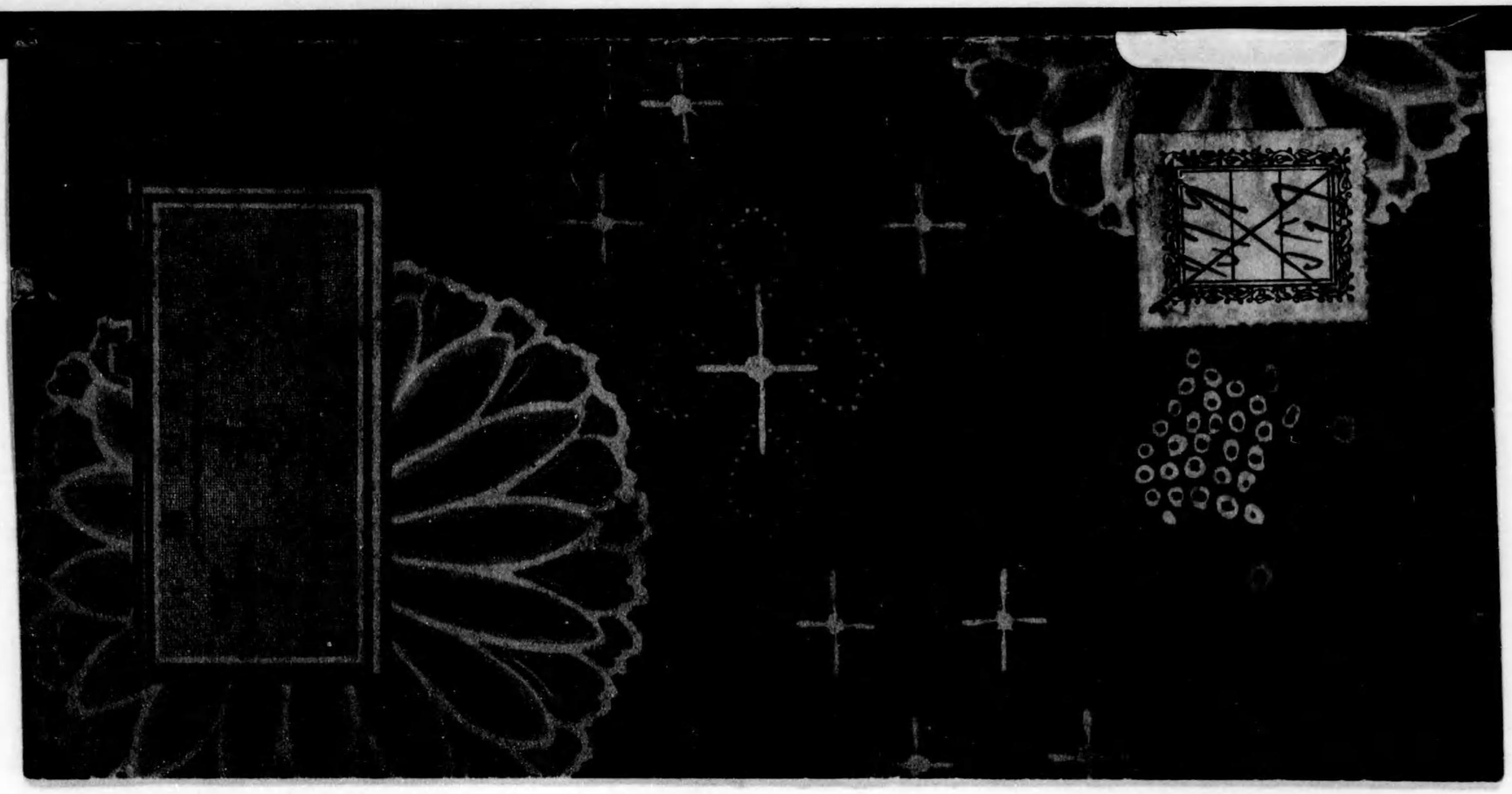
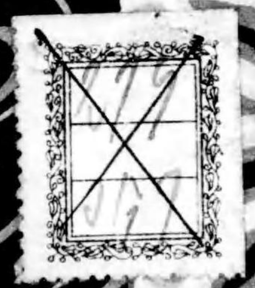
投



悲劇文庫

忘恩子

頗冠著



特100
128

AND AFTER DREAMS OF HORROR,
COMES AGAIN THE WELCOME
MORNING WITH THE RAYS OF
PEACE

—*BRYRANT*—

忘れ子

恐怖の夢醒
めて此處に
再ひ平和の
曙光を迎ふ

KYUKOKAKU
Kyobashi Tokyo

大正
7. 1. 25
内交

御あいさつ

人間は誰でも、慰安といふものが最も必要であるが、その慰安が餘り多きに過ぎ、或は永きに亘れば、却つて惰落に陷るのである。で同じ小說でも、徒らに事件を曲折し、或は字句を引き延して、讀者の大切なる時間を偷むといふことは、夙に生等の憂ふる所である、如何に慘澹たる十年の告白も、十幕二十幕に仕組むべき悲劇も、僅か二百頁の小册子で充分盡されるのである。本の大小、字句の多少が、直ちに小說の興味ではない、價値ではない。十七字の詩克く茶人の頤を解かせ、三十一文字の歌克く悶々の戀情を盡す。卽ち二百頁の小册子、亦克く波瀾重疊の悲劇を舒するに充分なのである。……と理屈を言へば、聊か手前味噌の嫌ひはあるが、先づ〳〵一編をお試しあつて、續々御愛讀あらんことを、

……爾云

發行者白す

忘れ子

『、よだんさ母生の統本の前おがれあ、のいかた見、のいかた見』
『、……いは』

悲劇文庫

忘れ子

頬冠者著

〔一〕

東京灣を一目に見渡した風景は、昔も今も變りはないが、羽田といふ地名が廣く世間に知られるやうになつたのは、つい近頃のことで、玆十五六年前は、實に淋しい一漁村であつた。

お近婆さんは、その當時から街道の村端で小やかな茶店を營んで居たが、春

も末つかたの或日の夕方、かれこれ七時にも間近い頃、顔色の恐ろしく青褪めた若い娘が、まだ生れたばかりの赤ン坊を抱いて通りがゝりに靜々と入つて來た。

賤しかちぬ風采といひ、窶れては居るが目鼻だちの美しさ、迚も鄙には居る筈の女ではないが窶れた樣子から推して見ると、お産をして二週間經つか經たぬほどの鹽梅、この身體で遠くから來る筈はないが、土地ではついぞ見たこともない若い女、お近婆さんは目をパチ〳〵させて、

『お出でなさいませ』と、女の樣子を見守つた。薄暗い洋燈の光輝は、亂れ髪をひッ詰めにした娘の顏色を、一層青白く照らした。

『濟みませんが、お湯を一杯下さいませんか。』

と、娘は割合に判然した言葉で、赤い毛布の床凡へ腰を下した。

『はい〳〵、さあ座布團をお敷きなさいませ、薄うございますから二枚重ねてお敷きなさいませ、お尻が冷えると不可ません……』と、お近婆さんは勝手な氣病みをしてそれとなく勸はつて、直ぐ湯を汲んで來た。そして乳房を銜へた赤ン坊を覗いて『アラまあ可愛らしい、好い赤さんでございますこと。何月お產れなさつたのでございます。』

『アノ、先月ですの……。』

と、娘は簡單に答へた。

「オヤまあ、それぢやまだ……』と、婆さんはそつと娘の顔を見た。幾等老人のお切匙だといつても、見ず知らずの女に忠告がましいことも言へないので言ひかけた事をそのまゝにして、話頭を稍や外へ向けた『若様で居らつしやいますか。』

『イ、エ、』

『お嬢様で……まあ美いお嬢様でございますねへ、色の白い、お乳が澤山だと見へて、お丈夫さうな……。』

と、お近婆さんは客に對する愛嬌といふよりも、眞から子供好きといふ口調であつた。

「イ、エ」と、娘は直に莞爾した。けれど、淋しい顔は依然として淋しかつた風采や人品から想像すると、決してその日に困るやうな人柄ではないが、まだ充分日經たない身體で、何所らか何所へ行くのであらうか、此邊ではついぞ見たこともない娘、何か仔細があるのだらうと、お近婆さんは人事ながら氣にかゝつてならなかつた。

と言つて、初めて逢つた女に、たち入つたことを聽くのも何とやら失禮なので、自分勝手に好い位の想像をして、蔭ながら同情を寄せて居た。

「まだ、充分お日經なさらぬやうですから、大變でございますねへ。是れから何方へ行らつしやいます。』

『此村の親戚へ一寸……。』

『オヤ、然うでございますか、まあ綽然休んで行らつしやいませ。』

と、お近婆さんは聊か當が外れたやうな顔をした。何とか深い仔細を聞かされるだらうと豫期したのが、案外簡單な答へであつたからである。

『有難う、お蔭さまで氣分も善くなりました。少しですけれど、これを……』

と、女は五十錢銀貨をお近の前に出した。

『要ませんよ、那麽に貴女……。』

『イエ、取つて置いて下さい、お茶代ですから。』

『左樣でございますか、胡麽に澤山貰ひましては濟みませんねへ、有難うござい

ます。』

と、お近は二三度銀貨を押戴いた。

『アノ、此邊に、何所か近い所に、大きいお菓子屋さんはありませんですかねへ。』

『さあ、大きいといふほどなのはありませんが、一丁ばかり參りますと、一軒ございます。』

『さうですか、一寸、少しばかりお土產を買ひたいのですが、坊やが待つて居ておくれだと好いんだけれと、厄介ねへ。』

と、娘は獨言を言ひながら立ち上つた。

『大變でございますねへ、つい直ぐでございますから、何でしたら、赤さんを置いて居らつしやいませ、私がお守をいたしませう。』

「さうねへ、濟みませんけれど、さうして下されば助かりますわ、手提げも何も置いて行きますから、それでは萬望。』

「エ、エ、宜しふございますとも、早く行つて來つしやいませ、表へ出ると瓦斯燈が見へて居ます』と、子供好きなお近婆さんは、赤ン坊を抱き取つて表へ出た『アノ向ふの灯がお菓子屋さんでございます。』

「オヤ、然うですか、ではお氣の毒さまですが、萬望』と、娘も吻として、始めて肩の重荷を下したやうに、心から微笑やかに赤ン坊を差し覗いた『好いねへ、小母さんに抱ッこしてお居で、一寸お土産を買ひに行きますからねへ大人しくして待つて居らつしやいよ。』

「ほゝゝほ、まだ解りません、お腹が好いと見へて、好くお寢みです。』

と、お近は眤と生毛のモヤ〳〵した顏を瞶めた。子供を愛するのは女の通有性だが、お近婆さんの子供好きは普通外れて居た。五十錢の茶代を恩に被た譯ではなく、心から可愛く思ふらしかつた。それを、娘は殊に賴母しく思つたらしい。

「萬望。』と、幾度も振り返へりながら、霞の立ち罩めた宵の街道を、敎へられたやうに急いで行つた。

お近婆さんは、暫らく背後姿を見送つて居たが、そこへ一人息子の勘造が、何家かで遊び晩して歸つて來た。十二三の腕白盛りで家へ歸るが否や『何かくれよ』と、お袋の腰へ貪み付うとした。

『最うぢきに夕飯ですから、何も强請るんぢやない』と、小聲で怖い顏をして靜にしろと制しながら家へ這入つた。

『何で食ふんだい。』

『何でも、お前の好きな物でお食べなそれ〳〵それを弄るんぢやない』と、お近婆さんは尖り聲で叱つた。腰掛に置いてあつた女の手提袋を、勘造が開けやうとしたからである。

『これ、誰んだい。』

『誰ンでも好い。』

『誰ンだつてのに？』

『お客樣のだよ。』

『お客樣？、居ねへぢやないか、居ねへから、開けて見たつて好いだらう。』

『不可ない。不可ないといふことをすると家へ入れないよ。其所へ置いときなさい。』

『見たつて好いぢやないか、一寸だよ。何があるんだらう。』

『コレ勘造、言ふことを聞かないか』と、お近は火ッと怫乎腹を立てゝ、いき

なり手提袋を引ッ奪つた。その拍子に寢て居た赤ン坊が目を覺まして、火が附いたやうに泣き出した。頻りに四股を踏んで賺して見ても、なか〳〵泣き止みさうにないので、仕方なく表へ出てお菓子屋の方へ行つた。

最うおッ付け歸る頃で、多分途中で逢ふだらうと思ひながら、行手を注意深く見ながら行つたが、それらしい女は一向見當らないで、そのお菓子屋まで來てしまつた。明ひ店頭をそつと覗いて見ると、不思議にも先刻の女は居なかつた。摺れ違つて眞逆解らぬ筈はないが、一體何家へ行つたのだらう——と、お近は小首を傾げた、幾等考へても、此店が解らなくつて、外へ行つたとは思はれない。不思議なと思ひながら娘の人體を話して、菓子屋の妻君に聞いて見た

が、

『イ、エ、那麼人は來ませんよ。』

と、お菓子屋の方でも不審さうであつた。

『まあ、何家へ行つたのだらう、一寸ね、赤ン坊を抱いとつてくれ直ぐ買つて來るからつて、最う先刻お宅へ來た筈ですのに。』

『來ませんよ、妙ですねへ、赤ン坊を預けて置くなんて。』

『それが、急いで行つて來るからつて、手提袋なども置いて居るんですよ。』

『ぢや、何家か、外で用をたしたのでせうよ。』

『さあ、外には、お菓子屋さんはありませんから、事によつたら、何か外の用

だつたのかも知れません。』

と、お近婆さんは、却つて娘の方が自分を探して居るかも知れないと思ひながら、大急ぎで歸つて見たが、家には勘造の外誰も居なかつた。

〔二〕

菓子屋へ行つた筈の女が菓子屋へ行つて居らず、直ぐ歸る筈だのに半時間經つても一時間經つても、ねッから歸つて來ないので、お近婆さんはいよ〳〵心配しはじめた。

夜は段々と更けて來て、最う店仕舞をする時刻、早く夕飯を食はせなければ

又勘造が店へぶッ仆れて寢るかも知れないと、それからそれへ要事があるのだが、赤ン坊がギャ〳〵泣くので如何することも出來なかつた。本統に土產物を買ひに行つたのなら、幾等手間が取れるにしても、疾くに歸つて來なければならぬ筈、如何も始めッから樣子が變だと思つたが、或は置きッ放しにしたのではあるまいかと、お近婆さんはいよ〳〵當惑した。

亭主が死んで以來、何かによらず難事しい事は皆隣家の喜平爺さんの所へ持ち込んで、相談に乘つて貰ふのが常であつたが、いよ〳〵赤ン坊も喜平爺さんの智慧を借らなければ、婆さん一人では迚も始末が付けられなくなつた。

『勘造や、一寸隣家へ行つて來るよ』と言ひ捨てゝ、手提袋と一緒に赤ン坊を

抱いて隣家へ行つた。

『そりやアお近さん、飛んだものを背負ひ込まれたねへ』と、喜平爺さんは簡單に様子を聞いて、大部難問のやうに言つた。

『背負ひ込まれたつて、最う取りに來ないかねへ。』

『そりや來ないわな、事によつたら、その娘てえのは、今時分濱でお陀佛になつてるかも知れねへ。』

『那麼ことが喜平さん……』と、お近婆さんは理由もなく非認しやうとしたが女の様子を思ひ合せて見ると、成程と思ひ當る節々があるやうに思はれる、

『こんな可愛い赤ン坊を捨てゝ、眞逆死ぬる氣にもなれまいに、如何したもんだか、まあ見なさい喜平さん、色の白い、鼻の高い、美い兒ぢや』と、染々溜息を吐いた。

『ほんに、こりや好い兒ぢや、何れ深い理由があつての事だらうが、孤兒にするのも可愛想だねへ。』

『もし此儘になるやうだつたら、私がいつそ、育てやうか知ら。』

『そりや善い事ぢや、出來るなら然うしてやりなさい、先方もお前さんの親切を見込んだのだから、さうしてやれば、定めし本望に思ふぢやらう。』

『喜平さん、私は然うするわ、ね、然うして育てやうよ』と、お近婆さんはソツと赤ン坊の顔を覗いた。誰が見ても美しい赤ン坊は、自分の子にして育てや

うと決心したお近婆さんには、一層美しく可愛らしかつた。

『それにしても、何か、その手提袋の中にありやアせんかねえ、一度出して調べて見たら如何だらう。』

『然うですねへ、でも、若し又歸つて來るやうなことがあつては惡ひから、最少し待つて見ませうよ。』

『ナアニ、歸つて來つこがあるものか、第一赤ン坊を預けて行くといふのが變だ。大切な子供を、何で見ず知らずの他人に預けるものかね、屹度、始めツからその積りだつたに違えねへ。』

『然ういへばさうだねへ』と、お近婆さんはやうやく思ひ切つて一とッちやにしても、喜平さんの前だから、何があつても盗む氣遣ひはない。では明けて見るかねへ。』

『さうしなさい、どれ、俺が見てやるべえ、何かあるに相違ない。』

と、喜平は手提袋を受取つて、樂みさうに開けたが、最初に出た紙包は、お守の入つた錦の袋『是れや守袋ぢや。』

『大變立派なお守だねへ。』

『ウム、如何せ、食ふに困る人間でないでのう』となほ次ぎの紙包を出して、

『こりや臍の緒と生毛ぢや、見なさい、こんなものを持つて迂路づく筈はない

『ねへ、確然り、始めつから捨てる覺悟であつたのぢや、明治三十四年四月二

十八日生、滋子としてあるが、眞逆役場へ届けてはあるまい、名前が筐といふ譯ぢやらう。』

『さうかねへ、滋子といふのかね、なか〳〵好い名前だ。』

『見なさい、シゲと假名が打つてある、好い名前ぢやが、確然りこりやア、お前にお近さん授かつたんだぜ、ホウ〳〵、紙入があるぞ』と、紙入を出して中身を覗き『ヤア、こりやお前、大變ぢや。』

『何があるね？』

『何のかのッて、こりや大變ぢや、紙幣がお前、しこたま詰め込んである。』

『エッ、だから言はんこつちやない、滅多に那麽ものを開けて見たら、飛んでもない事になる。如何したら好からう。』

『さあ、何でも、少々の金でねへから、朝にでもなつたら、駐在所へ届けるだね。』

『朝まで、那麽物置いとかれるものですかね、今まで歸らない者なら迚も最う歸る氣遣ひはないから、是れから一寸届けて來ませうよ。』

と、お近は青くなつて、赤ン坊を抱いたまゝ駐在所へ駈け付けた。そして顔へながら一部始終を物語つて、女の手提袋を差し出したが、赤ン坊を置きッ放しにして行つたのだから、養育費の一端にもと、所持の金を置いて行つたものと解釋して巡査はお近にそのまゝ着服しても好いと言つたけれど、何しろ未だ曾

て見たこともない大金なので、強いて駐在所へ置いて、表面回きに赤ン坊の籍も入れて育て上げることにした。

其の後警察署の方では、女の身許に就いて種々と捜索して居たらしかつたが如何しても解らないと見へて、手提袋をお近に下げ渡された。海へ身を投げたのだらうといふ評判もあつたが、それらしい死體も上らないで、噂はそのまゝになつてしまつた。

斯うして、可憐な滋子はお近婆さんの手一つで育て上げられたのである。天稟いて怜悧しい滋子は、又美しく生長して、近郷近在の評判娘となつた。我子の勘造は十六の春、東京の或指物屋へ小僧にやつたが、性來我儘者なので、半

年も經たぬ内に無斷で其家を飛び出して、勝手な眞似をして無心にばかり來て居たが、如何したものか近頃は些とも寄り付かないので、何所で何をして居ることやら肉身の母子でありながら、それさへ知れなかつた。

『あんな我儘者より、私は滋子にかゝる、滋子の方が餘程「可愛い」』と、お近婆さんは口癖のやうに言つた。又實際に於て、勘造よりも、滋子をより以上愛して、片時も傍を放さなかつた。滋子の爲めには、貰つても借りても、好い物を食はせ美い物を着せたかつた。

『矢張りあれも因縁だ。前世では眞の母子だつたのだらう。』と、知つてる者は皆不思議に思つた。

滋子も物心がつく頃から、誰に聞くともなく自分の身の上を知つて、隨分癪い所へ手の届くほど忠實に仕へた。小學校も優等で卒業し、模範的の孝女といふ理由で、神奈川の縣知事から表彰せられて、縣の奬學金で横濱の女學校へ入學し、今年の春最優等で卒業したのだが、滋子は猶ほ進んで高等の教育を受けて、自分の腕一本で母を安樂に過させやうと思つて居たけれど、諸方の大家から結婚の申込があつて、その話の行が〻り上、終に入學の時機を失ひ、徒らに燃ゆるばかりの期望を抱いて、明年の入學期を待つの外はなかつた。然もその間に於てお近から結婚を勵められたら、如何いつて斷らうかと、それが何より心元なかつた。

〔三〕

東京と横濱を在右に控へた羽田は、年を經るに從つて段々發展して、殊に海水浴場が出來て以來は、夏は避暑客がドン〳〵詰めかけ、農家でも間貸をして一年の小費を儲けるといふ有樣、山は切り開かれ、海岸は石垣を築かれて、數十萬圓を投じた立派な別莊も、あちら此方に建築せられた。

御門子爵の別莊も、つい此夏の初めに落成して、子爵夫妻が移り住んだが、珍らしいのと建築の工合が御意に叶つたので、初秋になつても本邸へ引き上げなかつた。如何せ本邸へ歸へても要事のない身、議會でも始まれば貴族院議員

として登院しなければならぬが、それとても、京濱電車の便を借りれば、當地から通つても雜作はないから、當分歸らないと定つたとかで、出入の商人は皆喜んで居る。殊に魚久なぞはお花客の半分が別莊なので、冷しくなるに從つて毎年閑になるのだが、今年は御門子爵家が一軒あるだけでも、大家だけに大邊の違ひであつた。

『婆さん、今日は好い小鰺があるせ。』

と、魚久は例日のやうに行商の歸りにお近婆さんの店へ腰を卸した。駄菓子なぞ抓んで一休みするのが常なのである。

『オヤ、最うお歸りかね、例日勉強だねへ。』

『さうさ、稼がなきや食へねへ生れ合せなんだから仕方がねへやな。人間もオギアと生れた時の運次第で、華族にでも產れりや好いが、魚屋にでも生れた日にや事だ。』

『那麽ことがあるものか、那麽に久さん、華族といふものが有難いかねへ。』

『有難いとも、此夏出來た御門子爵さんの別莊へでも行つて見ねへ、立派なもんだせ。』

『さうだつてねへ、まだ殿樣が居るんだつてねへ、久さんなんぞは、お出入だから大邊違ふだらうねへ。』

と、お近婆さんは駢んで腰を卸して、面白さうに對手になつた。何十年來街道

の人を對手にして生活して來たゞけあつて、竹を打ち割つたやうな氣さくな婆さんであつた。

「さうだよ、華族なんてえものは主人は一人か二人でも、家來眷族が多いし、間斷なしにお客だからねへ、今年は有難いよ、ア、いふ華客が二三軒あつてくれゝば、俺もさう永く貧乏して居ないがねへ。」

「久さんは、最う隨分出來たらうよ。」

「何が、出來るといやア餓鬼位のものだ。」

「ほゝゝほ、三人だらう。」

「ナアニ、四人よ、嫌やになつちもうぢやねへか、それも、此家の滋ちやんのやうな娘なら好いが、イヤ最う瓜の木に茄子は生らんとは好く言つたものでさ、魚屋の子は矢張り魚屋か漁夫だよ。」

「那麼ことはないわね、今に出世するわね。」

「はゝゝは、何だか解るものか」と、魚久は氣にも留めないで、頭から笑つて退け「子供では婆さん、迚も樂はさせないよ、そこへ行きや婆さんなぞは仕合せさ、今日俺ア始めて御門さんの夫人の顏を見たんだが、如何も此家の滋ちやんに酷似だぜ、目元と言ひ口元と言ひ、全くあんなによく似た者もないよ。」

「那麼ことがあるものかね、氣の爲だよ」と、お近婆さんは揶揄れるとでも思

つたらしい。

『イヤ、全くだよ、全く好く酷てる、誰だつたか、夫人が御門さんへ入嫁かない前に、生た子ぢやないかつて、言つて居たものがあつたッけ……。』

『飛んでもない、那麼ことが久さん……。』

と、婆さんは稍や顔色をかへて、お針をして居る滋子を振り向いた。滋子も先刻から魚久の話を聞いて居たと見へて、同じく店を見送つたが、期せずして二人の視線が出會したので、ハッとして俛首いた。誠の母親が未だ此の世に活きて居ると知つては、逢ひたいのは無理ならぬこと、お近としても、逢はせたいのは山々である。

思ひ出せば、丁度十八年前、春も中ばの或夕方、色青褪めた若い女が、まだ產れ落ちたばかりの滋子を抱いて、ションボリと此の店先きへ來て、懈げに乳房を銜ませてゐた姿が、今も猶ほ明々と眼前にちら付いて、お近婆さんは迚も十八年の昔とは思はれなかつた。あの美しい容貌と、あの氣高い人品を思ひ合せると、魚久の言葉が強ち虛ではないやうに思はれる。

『イヤ全くだ、濱へでも出た時に好く見なさい、誰が見たつて、似て居ないものは恐らく一人もあるまいよ、全く生寫しだよ、顏ばかりぢやない、細りとした身體の工合から、髮の生え際までが酷似だ』と、魚久は眞面目であつた。

「さうかねへ、他人の空似ッてこともあるが、不思議だねへ。」

「さうさ、他人とすりや全く不思議だよ。」

「年は？。」

「さうさねへ、三十七八でもあるかねへ。」

「三十七八といふと、あの時丁度二十格好だから……」と、お近婆さんはそれッきり默り込んでそれとなく考へ始めた。口でこそ似て居るのが不思議だと言つたやうなものゝ、心では決して不思議だとは思つて居なかつた。魚久のいふことが本統なら、九分九厘まで御門子爵夫人が滋子の母で、十八年前のあの女に相違ないと、獨り我と我が心に首肯いて居た。

〔四〕

今も眼前にちら付く彼の娘、一寸一目子爵夫人を見れば、いよ〳〵滋子の母か母でないか直ぐ知れると思つて、お近婆さんは如何ぞして塀の隙間からでも一目見たいと思つた。そして、ならうことなら、たつた一度でも好いから、人目を忍んで母子の名乘をさせたいと思つた。

滋子が何にも知らないのなら兎に角、知つて居る以上、本統の母親に逢はせぬのは、如何にも不愍である、自分の目の黑い内に、假令一度でも好いから、染々逢はせてやりたいのがお近婆さんの一生の願ひで、恐らく滋子も會ひたい

のが一生の願ひに違ひない。育ての親への義理を思つて、那麼顔色は少しも見せなかつたが、魚久の話を小耳に夾んで以來、生母を慕ふ心を深く胸底に押し隱して居るさまは、心あるお近には充分に酌み分けられて、その殊勝な心根が不憫でならなかつた。

「ねへお滋やお前も久さんの言つたことをお聞きだらうが、如何もあの新らしく建つた華族樣の夫人が、お前の生母さんのやうに思はれてならない。お前を連れて入來つしやつた時分には、產後で寢れて居たけれど、なか〳〵品の好い女であつた。迚も平民の娘とは思へなかつたが、矢張り華族のお孃樣であつたかも知れない、如何かして、一度でもお前を會はせたいねへ」と、思

ひ入つて慰めるやうにいつた。

「イヽエ、妾最う、お母さんより外に、生母はないものと思つて居りますの、萬望お母さんも、その積りで居て下さいねへ。」

滋子は最う目を濕ませて居る。

「さう言つて呉れるのは殊に有難い、悴はあつても彼の通りのやくざ者で、迚も私の手寄にはならないからお前一人が手寄で、何より嬉しいけれど、本統のお母さんがまだ此の世に居ると思へば、逢はせないのも何となく心殘りで後々のことも案じられるから、若しそれが本統のお母さんだつたら、萬望逢つておくれ、ねへ、さうしないと、第一私の氣が濟まない。」

「はい、色々と御心配ばかりかけまして、濟みませんわねへ、私は何故、お母さんのお腹から生れなかつたのでせうねへ。』

と、滋子は流れ落ちる涙をソッと押し拭つた。

『飛んでもない、こんな卑しい婆の腹から生れたら、迚も斯う美しくは產れられないよ。矢張血統といふものは爭はれぬもの、華族の夫人になるやうな方の腹から生れたからこそ、容貌といふ天性といひ、十人普を飛び越へたお前私の娘には勿體ない。』

『まあお母さん！　何故那麼ことを仰者いますの、私こそ勿體なうございますわ、萬望今まで通りに、本統の娘と思つて、御面倒を見て下さいませ。』

『よく言つておくれた、それは最う何所までもその積りだが、お前が私の本統の娘でないことは皆村の者は知つて居るのだから、せめて、あゝいふ立派な華族樣の種と知れゝば、お前の身體に箔が付くやうなもの。第一私の鼻が高い。』

『イヽエ、萬望ねへお母さん、若し然ういふことが評判になつて、御門樣の夫人が御迷惑遊ばすやうなことがありましては、却つて私、悲しうございますから、萬望、何にも仰有らないで、捨てゝ置いて下さいませ。』

『さうだねへ、然う言へば然うだねへ』と、お近婆さんは少からず困つた。何しろ華族樣の娘を我が子にしたと思へば、自慢したくて堪らないが、滋子の

道理を聞いて見ると、又成程と合點が行く『だけど、此ま丶、生みの親に會せないのも不憐だから、一度、人目を忍んで會へば大丈夫、尤も、まだ私が直接に見た譯ぢやないから、愈々さうだとも定められぬが、久さんの言つた通りとすりや、九分九厘まで然うだらう、私が兎に角、他所ながら一度會つて見るから、若し本統の生母さんだつたら、遠慮はないからお前も逢つてごらんよ。』

『はい。』

『先方樣でも、大方お氣にかけて、お探しになつたかも知れないが、何しろ昔とは村の樣子が違つたから探し當らなかつたのかも知れぬ。早くお目にかゝつて見たいものだが、如何したら好からうか』と、お近婆さんは獨り小首を傾けた。

何しろ先方は身分の高い華族で、此方はあるかないかの下賤な身の遊びにでも出た時に一寸見る外はないが、附近の者でもついぞ見かけない位で、殆んど外出しないのみか、出入の者にさへ滅多に姿を見せないといふことだから、お近婆さんなぞが到底近付くことは出來ない、魚久に相談をして見たら或は好い機會がないとも限らぬ——と、例日のやうに魚久の歸りを待ち受けて、

『ねへ久さん、お前さんの言つたことに、眞逆嘘はあるまいねへ。』と、眞面目

に、重々しく念を押した。

『何がい、俺ア滅多に嘘は吐かねへぞ。』

『イヽエさ、あの華族さんの話なんだがね。』

『ウム、夫人さんが、お滋坊に似てるッて事かい。』

『さうだよ、本統だらうねへ。』

と、お近は一膝乗り出すやうにした。

『本統だとも、まあ行つて見ねへ、婆さんが一目見りや直ぐ解る』と、魚久は向きになつた。

それは、滋子が赤ン坊の時、お近婆さんの店に置き去りになつた哀れな身の

上だと知つて居るので、常から同情をして居たから、容貌が似て居る御門子爵夫人が、殊更目に着いたものと見へる。なほ然う言ふ評判が一寸々々土地の村人の間にあると聞いては、少しも疑ふ餘地がなかつた。

『如何もね、生母さんは立派な人だつたが、それではそれに相違あるまい、私も一寸見たいのたが、好い工合に、お顔を見ることが出來まいかねへ、久さん。』

『さうさねへ、然ういふ覺へがあるからかも知れないが、何しろ、一寸も門から外へ出ないやうだからねへ、私等のやうに、毎日お出入して居ても顔を見たのは二度か三度だ。』

『困つたねへ、では矢張り、覺えがあるからかも知れない。』

『然うだよ』と、魚久は名他豆煙管を咥へたまゝ大きく首肯いて『待てよ、明日殿樣の親御樣とかゝ、始めて別莊へ來るさうだから、事によつたら停車場まで迎へに出るかも知れないせ、何でも小間使の女中さんが、愚圖々々言つて居たつけ、俺も氣に止めて居なかつたから、好く知らないが、屹度さうだよ。』

と、想像ではあるが殆んど確定的に言ひ切つた。

『オヤ、それなら誠に可い都合だが、何時頃だらうねへ。』

『さあ、お午前だらうよ、東京を朝出りやお前、丁度お午に着かアね。』

『さうかねへ、確かに來るのかねへ。』

『來るよ、それは確かだ、最少し早く來る筈だつたのださうだが、何しろ、今の殿樣が四十三四だらう、その人のお母さんだから年寄りでね、夏の盛りには出られなかつたのださうだ、大變口八釜しい人だとかで、女中さんなぞは皆零して居る』と、魚久は自分の想像に證明するやうに言つた。

『では、來るには來るんだねへ、有難う、それさへ解つて居りや、私しや明日一日門前へ詰めきつて居やうよ。』

と、お近婆さんは非常な意氣込みである。

『さうだ、然うしねへ、さうしたら否やでも應でも逢はれるよ。逢つて見た上

で、若しお滋ちやんの母親だつたら、又機會を見て逢はしてやりなさい、假令表面向き母親といふことは出來ねへにしても、華族の奥方を母親に持つて居ると思やア肩身が廣い、婆さんだつて幾等か鼻が高からうぢやねへか。』

『さうだよ、全く、私しや元から、さう賤しい人の娘ぢやないと思つて居たが華族樣のお嬢樣とは知らなかつた。勿體ない、平民の婆がお滋々々と呼び捨てにして……。』

『ナニ、そりや仕方がないやな、育ての親だもの、兎に角一變逢つて見ねへ。』

『逢ふよ。明日は朝から詰めかけて居やうよ。世間は廣いやうでも、狹いもんだねへ、久さん。』

『さうさねへ。まあ行つて見ねへ。』

『有難うよ。好く知らして下さつた。またお禮はするからねへ』と、お近婆さんは大喜びである。別に滋子が生母に逢ひたいと言つたわけではないが、生母が他にあることを知つて居る以上、口へは出さなくつても不可解のとして一生心を痛めるに相違ない。自分の目の黑い内に、其謎を釋にてやるのが自分の責任で、やうやくその責任を果し得るのだと思へば、お近婆さんは最うそれ以外に思ひ遣すことは此世に何にもなかつた。

〔五〕

生さぬ仲ではあるが、お近婆さんはこれまで一度も滋子に隔てがましい振舞をしたことはなかつたが、今度のことは一から十まで相談し難いので、自分の心持ち通りに、翌日は朝から御門子爵の別荘へ行つた。

別荘は人家を少し離れた小高い所にある、お近婆さんの家から、街道を右に取つて、鐵道線路を越えると直ぐ向ふの雜木林をきり開いて、幾然り四邊に聳えて居る西洋建の家がそれである。遠くから見ると西洋建ばかりのやうであるが石柱鐵扉の嚴重な門の奥には、大きな日本建の母屋がある、西洋館の所はそれ

より一段高くなつて居るので、遠くからでも良く目立つて見えるのだが、大いさといひ、立派さといひ、日本建の方は一層美しかつた。

門脇には請願巡査の見張所があつて、丸腰の警官が植木か盆栽かを弄つて居るらしかつた。上着を脱いだまゝの姿で裏へ行つて土鉢を持つて來たり、肥杓を持つて行つたり、頻りに忙しさうに往つたり來たりして居る。

お近婆さんは、門前から少し離れた所で、恐ろしさうにきよろ〳〵覗き込んで居たが、奥方はさて措いて、誰一人として出て來る人はなかつた。拭き掃除でもして居るらしい人が、時々玄關先をチラ〳〵するばかりである。婆さんは四邊の芝生に腰を卸して、暫らく休んでは、又門前から窺つて見た。けれどお

正午近くになつても、お正午になつても、出て來る人はなかつた。たゞ一臺の自動車が、異樣な唸き聲を立てゝ婆さんの前を風を切つて行き過ぎ、一氣に玄關へ横付けになつた。

その唸くやうな自動車の聲を聞き付けて、子爵家の誰れ彼れが、玄關へ出て來たらしい、眤と見詰めた婆さんの目には、運轉手が脱帽して、お辭儀をしたさまや、五六人の子爵家の人々が辭儀をしたり笑つたりするのが見へた。

あの自動車で、停車場へ行くのか知ら――とも思つて見たが、自動車は玄關先から婆さんの視線を去つて、そのまゝ何時まで經つても出て來なかつた。夕方まで立つて居ても誰一人も出て來るらしい樣子がないので、お近婆さんは落膽しつゝ、若しや魚久に騙されたのではあるまいかと、疑ひと失望を以つて歸つて來た。

家では、婆さんの歸りが遲ひので、滋子が非常に心配して居た。

『アラ、お歸りなさい、今其所まで見に行かうかと思つて居たところなのよ、大變遲うございましたのねへ。』

と、氣遣しさうに母の顔を見戍つた、詐りもなく迎ひに行く積りだつたと見へて、平常着の上に帶を締め直して居た。

『今まで立つたきりで、疲れたわね。ヤレ〳〵、とんだ目に逢つた。』

『如何なさいまして？。お逢ひになれましたの。』

『イヽエね、逢ふにも逢はないにも的確久さんに騙されたんだわね、莫迦々々しい、朝から門前に立ち詰めで、待つても〳〵出て來ればこそ、誰アれも來やしない、トウ〳〵今まで待ち疲びれ損、大方、お前が私の實子でないことを知つて居るから、良い位のことを言つて、揶揄つたんぢやらうぞい、罪な人ぢや。』

『まア、隨分ですのねへ、では、まるつきり嘘なんですの』と、滋子は目を睜つた。惘れるといふよりも、失望の色があり〳〵と見えて、今更ながらお近婆さんはいぢらしくなつた。

『さあねへ、眞逆嘘を吐くとは思はないけれど、何しろ、誰も迎へに出たやうな樣子はなし、自動車が來たばつかりで、誰も來なかつた。』

『では、その自動車ぢやなかつたのでせうか。』

『さあ、然ういはれて見ると、それも解らないねへ。』

『まあ、見なかつたのですの。』

『ナアニ、見るには見たがね、何しろ人の鼻先をひッ小摺るやうに駛つて、門の中へ這入つてしまつたから、見る間も如何する間もありやしない。折角見に行つて、迂濶したねへ、門の傍へ行つて、玄關へ出た人をよく見ればよかつた』と、お近婆さんは殘り惜しげに言つた。幾等殘り惜しくつても、魚久の言葉が全然嘘でないとすれば、又何日か逢ふ機會があるだらうし、何も事

實が相違してると定つた譯でないから、まだ多少心強い『明日でも久さんが來たら、又よく聞いて見やうよ。』

『さうですわねへ』と、滋子もお近婆さんと同じやうに、魚久に聞いて見れば實否が凡そ解るだらうと、私かにそれを案じて居た。

翌日も、例日の刻限になると、魚久は輕くなつた荷を表へ下して、腰の煙草入を拔き取りながら、ヤレ〳〵と自分の家へでも歸つたやうに、吻として入つて來た。

『久さん、今歸りかえ。』

と、待ち兼ねて居たお近婆さんは、直ぐ店へ出た。

『ウム、やつとお役が濟んだ譯さ、此頃のやうに不漁が續いちゃ、魚屋は全然上つたりだ。』

『那麽に不漁なのかねへ、家なんぞちやねッから魚に御用がないから、とんとお關なしだ。』

『それだから困るのさ。』と、魚久は手の掌に火玉を吹き出して『それはそうと如何だね婆さん、いよ〳〵夫人がお滋坊のお袋かい。』

『なんのいな久さん、明日は酷ひ目に逢つたわな、一日待ちほうけを食つて、今日は朝から腰が痛うてどもならん、莫迦々々しいッて、あんな莫迦氣たことはありやしない、一體久さん、本統かね、昨日お前さんの言つたことのは

―』

『オヤ、ぢや未だ逢はねへのかね』と、魚久は目を剝いて『何のこッた。今も『此家の前を通つたぢやねへか、夫人と明日來たお隱居と、小間使が二人踵いて……俺ア最う知つてることだとばかり思つて居た。』

『エ、、今といふと、たつた今通つた人達かね。』

『さうよ、四人連でブラ〳〵濱の方へ行つたぢやねへか。』

『まあ、それは迂濶して居た。ぢや久さん、私は直ぐ行つて來るわね、お滋やお滋や、お前も一緒にお出で、さあ早やう。』

『お母さん、妾、お留守番をして居てよ。』

留守番は久さんに賴んで、早く行つて見やう、つい此鼻先を通りながら、先方樣も此家に血を分けた娘が居やうとは氣が付かず、此方でもたッた一人の母親だとも知らないで振り向ひても見ないとは、何といふ緣の薄い生れ合せだらう、さあお滋や、早くお出で。』

と、お近婆さんは慌てきつて、ブツ〳〵こんなことを口の内で呟きながら、滋子を急き立てゝ表へ飛び出した。

嫌や應なしに留守居を命じられた魚久は、今更斷りかねて、苦味い顏して二女の背後姿を見送つた。

〔六〕

魚久がお近婆さんに話した如く、御門子爵の別莊では、御前樣の時子が始めて新築の別莊へ來たので、子爵夫人の秋子を始め、お小間使から女中下男に至るまで、隨分氣骨を折らなければならなかつた。老人の常とは言ひながら、性來が口八釜しい方なので、成可く落度がないやうにと、物事に内氣な秋子夫人は、殊更注意に注意して、時子の一擧一動に目を注いで居た。

斯ういふ風だから、上を見習う小間使や女中までがよく心得て凡てを愼んで居た。當地へ來てからは暫らく伸び〳〵して居たが、此夏の始めまで、東京の

本邸で一緒に暮して居た間の秋子の心遣ひは、迚も普大低ではなかつた。

『夫人樣は、ほんとによく氣の付く、優しい方で……』と、召使が染々噂するほどであつた。

だから、今度御前樣の時子が別莊へ來ると、秋子夫人は何から何まで氣をつけて、俄かに甲斐々々しく立ち働いた。今までは餘り外へも出ないほどであつたが、ブラ〳〵門前の林の中や濱の方へも案内をした。

『ねへお姑樣、これから、その角を出離れますと。東京灣がずつと見渡されるのでございますの、晴れてさへ居ますれば、横濱も手に取るやうに見へるさうでございますが、今日あたりは、よく見へることでございませうよ。』

と、秋子は種々と説明しながら案内するのである。

『オア、然うですかねへ、それでは別莊を、いつそ其海がよく見へる所に建てたらよかつたらうにねへ。何故然うしなかつたのでせうねへ。』

『はい』と、秋子は自分が苦情でも言はれたやうに、從順に首を垂れて『でもお姑さま、西洋館からは、好く見へるぢやございませんか。』

『見えても、遠くぢや何にもならん、海といふものはな、廣々としたのを見るばかりでなうて、波が立ち騷ぐところが又好いものぢや』と、何にかにやらず苦情を付けたがる時子は、勝手な理窟を言ひながら、角から濱へ出離れて

『ヤレ〳〵、是れは好い景色ぢや』と、小間使に手を曳かれたまゝ、少し曲つ

た腰を伸した。

『良い風が吹きますこと』と、秋子も共に吻として、鬢の縺れをかき上げた。門から外へは餘り出たことがなかつたが、斯うして出て見ると、氣が伸々して大きくなるやうな氣がした。

今年三十七といつても、化粧が行き屆いて居るのと、天禀ての美貌とで、五ツ六ツは確かに若く見へた。金紗お召の單衣に、紹お召の紋付を羽織つた姿は四邊を拂ふばかりに氣高く美しかつた。笑つても動いても、得も言はれぬ奥床しい香氣が漂ふた。

『最少し、浪打際へお姑さま參つて見ませうかねへ。』

『さうですねへ、さあ、お先きへお行きなされ。』

『イエ、萬望お姑様、お先きへ。』

『イヤ私はね、如何もその、砂の所は歩き馴れんでね、足袋の中へ砂が這入つて誠に困る。』

と、時子は兩手を小間使に任せながら、むづかしい歩調で、それでも先きに立つて浪打際の方へ進んだ。

此の四人連れの有様を、一丁ばかり隔つた所から、頻りに見送るのはお近婆さんと滋子である。

『如何も、姿はよく似て居るやうだ、さア、濱づたいに追ひ越して見やう。』

と、お近婆さんはまだ慌て氣味である。

『まア、お母さん最少し様子を見て居らつしやいな、御隱居様と御一緒ですから、若し悟られるやうなことがあつては、取り返へしが付きませんわ。』

と、滋子は無理にも引き留めやうとした、末見の女でも、本統の母と思へば何所までも庇護いたかつたのである。

『那麼ことは大丈夫、何も聲をかける譯ぢやなし、何の、解るものかね、』

と、お近はなか〳〵凝として居ない、滋子の手を確固と握つたまゝ、同じく浪打際の方へ四人の背後を追ふた。

それとも知らぬ子爵夫人等の一行は、白い浪頭がスル〳〵と這ひ上り這ひ退

がるありたりに立ち停つて、水平線上に浮ぶ船や水鳥に、目庇をつくつて恍惚れて居た。彼所が横濱、此方が洲崎、房州があれで横須賀が此あたりと、夢中になつて指示合つゐてた。

そこへ、胸を跳らしながら、秋子夫人の横顔に目を注いで、一二間離れた所を行き過ぎやうとしたのはお近と滋子である。四人は跫音を聞き付けて、譯もなく思ひ〳〵に振り向ひたが、秋子夫人の視線をお近婆さんの視線が出合つた時、婆さんは脚が自然に縮むやうになつて、弗と立ち停つた。秋子は直ぐ視線を外した。けれど、再びお近婆さんと滋子が三四間行き過ぎた時、秋子は昵と稍や永い間振り向いて居た。お近も滋子も振り返つて、互の視線は又々出逢つ

たが、それと同時に、

『お姑樣、あちらへ參りませう』と、秋子はすた〳〵先きに立つて、反對の方へ行くのであつた。

お近婆さんは立ち停つた、滋子も立ち停つて、背後姿を見送つた。

『見たかいのお滋、好く見たかいの』と、お近婆さんは聲を顫はせて、思はず滋子の手を握り締めた。

『はい。』

『あれが、本統のお前のお母さんぢや、年は取つても姿は變つても、爭はれぬものは血統の母娘、慥かに、本統のお前のお母さんに相違ない。』

と、お近はツルリと流れ出る涙を、袖口でソッと押し拭つた。

『はい』と、滋子の目からも熱い涙が、一滴二滴、浪のうねりを印した眞砂子に滴り落ちた。

〔七〕

背後姿を見送つたお近と滋子は、呢と瞳を据ゑて見詰めたまゝ、身動きもせず口も訊かなかつたが、三四丁も隔つた秋子夫人の一行は、水泳場の杭が殘つて居るあたりから、町の方へ行つて終に視線から去つてしまつたので、始めて吻として顔を見合せた。

『何といふ薄情な女だらうねへ、如何せ我娘を捨てゝ、自分ばかり華族の夫人で納つて居るやうな女だから、無理もないことだが、現在自分の腹を痛めた娘を見ながらよくも〳〵、よそ〳〵しくして居られることぢや、涙一滴も落しやしない。』

と、お近は口惜涙を流さんばかりに言つた。

『イヽエ、お母さん、然う惡くばかり取つては濟みませんわ、お姑樣の手前があるから、定めしあんなに他所々々しくなすつたのでございませう、萬望お怨みなさらないで下さいませ。ねへ、如何せ妾は前世から斯うなる因緣があつたのでございませうから、お母さんの外には最う母親はないものと思つて

何にも考へないで暮したうございます。萬望、お母さん、お母さんもその積りで、知らない以前と同じやうに、可愛がつて下さいねへ。』

と、滋子は堪りかねて、堰き來る涙を袖で押へながら、言ふ聲あへ涙に濕りがちであつた。

『それは最うお滋、假令如何ならうとも、お前は矢張り私の娘ぢやがの、產みの兩親を知らさないで、若し私が此儘死んでしまつたら、一生お前が親を知ることが出來ない、それが私しや心殘りでの、死ぬにも死ねないのだわね、是れまでもその事ばかりが氣になつてならなかつたが、是れといふ手懸もないので、遂其儘にして居たけれど、久さんの話を聞いて、やつとお母さんに

逢ふにはあつたが、如何かして、一度でも母娘の名乘をさせなければ、育てた私の役目が濟まん……ア、如何したら好からうか、自分の產み落した兒が可愛くないものが本統にあるものかねへ。』

『永い間、お母さんに苦勞をかけた上に、飛んだご心配をかけまして、濟みませんのねへ。』

と、滋子は自分の罪を謝すやうに言つた。けれど、今更育ての親と言ふ隔てを意味した言葉が、自分ながら水臭いやうに思はれて、母の機嫌を損じはすまいかと氣遣ふやうにお近の顏を眤と見た。

その滋子の顏を、お近も眤と見返へして『如何も〳〵、好くまあ斯うも似た

ものだねへ、母娘とは言ひ狀、今の夫人樣に、お前の面差が酷似、ア、ア、世が世なら、おんば日傘で育てられるものを……。』

『其那ことをお母さん……。』と、滋子は慌てゝ遮つて『妾、斯うして、お母さんに可愛がつて頂いて、育てゝ頂いたのが何より嬉しふございますの、幾等お金持の家に生れて、なんにも不自由がないやうに見へても、隨分、悲しい思ひをして居る方がないとも限りませんからねへ、妾何日も、然う思つて居ますの、お母さんに可愛がつて頂いて、まあ何て妾は幸福な生れ合せだらうと——。』

『お滋や、私しや、私しやお前が手寄だからねへ。』

『何日までも、二人ッきりで、仲好く暮しませうねへ。』

『よく言つておくれだ、それが、私は何よりも有難い』と、お近婆さんは滋子の手を握つたまゝ『此所で何日まで斯うして居ても仕方がないから、一先づ家へ歸つて、又久さんにもよく相談して見やう。』と元來た方へ歩み出した。

斯ういふ時に隣家の喜平爺さんが居てくれたら、何にかに付けて相談對手になつてもらへるのだが、婆さんより五ッ六ッ年上の喜平は、一昨年の秋、七十三で定命が盡きて、不歸の客となつて以來、婆さんの力になる者は、實子の勘造よりも滋子で、毎日店で一服して行く魚久でも、勘造よりは遙かに力になつた。

その魚久は、否應なしに留守番をさせられて、首を伸したり縮めたり、今か今かと二人の歸りを待つて居たが、なか〳〵歸つて來る樣子がない、幾等冷風が立つた今日此頃でも、さう〳〵打ちやつて置いたら、殘つて居る魚が腐つてしまふので、全く氣が氣ぢやなかつた。

『チョッ、飛んでもない奴にとッ攫つて、酷ひ目に逢つた。何日まで何をして居やアがるんだらう。』

と、一人やき〳〵思つて居たが、何しろ根が世話好きの好人物だから、ブツブ言ひながらも、口が苦味くなるほど煙草を吹かして待つて居ると。凡そ、二時間餘りも經つたかと思ふ頃、やうやく二女が歸つたので、

『おい〳〵、婆さん、何時まで何をして居たんだい。』

と、俄に勢よく煙草入を腰に差した。口でこそガミ〳〵言つても、口邊には笑が漂ふて居る。

『アラ、濟まなかつたねへ久さん、とんと忘れて居た。留守番をして貰つたんだねへ。』

『さうさ、冗談をいつちや不可ねへ、だから斯う永く待たしたんだね、可愛さうに、魚類が皆腐つてしまわアな、まだ是れから歸途に一二軒お華客へ寄るんだぜ。』

『さうかね、それは惡るかつたねへ、又何かで入れ合せをするわね、今日は免

しておくれ、私等母子に取つちや大變なんだからさ。』

『ウム、如何したい、矢張りさうかね』と、魚久はまだ思圖々々して、さう急ぐ風もなかつた。

『有難うよ久さん、世間へは內證にしておくれだが、如何も然うらしいんだよ』

と、お近婆さんは、態り曖昧に言つた。何となく御門夫人の秘密を守つてやらなければならぬやうな氣がしたからである。

『然うだらう、何でも好く似てると思つたよ。それはまア好かつた。先方でも氣が付いたらしかつたかね。』

『氣は付いたらしかつたがね、久さん、人間といふ者は、十人十色といふけれ

と、親子の情愛に變りはなささうなものだが、涙一滴零さないでね、二三度振り向ひたゝけで、御隱居樣を急き立てゝ歸らしやつたが、私等はな、迚もあの眞似は出來ん、自分の娘だと思つたら、世間も人前もあるもんぢやない連れて歸へらにや承知せんがねへ久さん、自分の娘に替へる寶が此世の中にあるものかねへ。』

『さうさ、お互ひの仲ぢや然うだがね、如何も、人間は上流になるほど薄情になるやうだねへ、早い話が、俺等のやうな者は、嬶と喧嘩をすることもあるけれど、それはまア仲が好ずきてやるんで……は……は、惚氣ぢやないよ全くだよ。親子にしたつて、隨分仲が好い、一ッの物を半分づゝにして食ふけ

れど、上流になると、小供が產れたつて手元へ置かねえで、おんばさんに任せッきりにして、そしらぬ顏をして居るんだからねへ、慥かに薄情だよ。薄情な奴が多いよ。ヘン、涙なぞ零ずもんぢやない、當り前だよ。』

と、魚久は大に意見を發表して、そのまゝ又腰を据ゑてしまつた。

『如何も然うらしいねえ』と、お近婆さんもその意見に同意して『だから困るわね、先方樣が滋子を慕つて來てくれゝば好いけれど、此方からは押しかけて行くことは出來ないからねえ、如何したもんだらうなア久さん、目と鼻の間に本統のお母さんが居るのを知りながら、たつた一度も言葉を交はさないでは、如何も私は死んでも死きれない。』

『さうだよ、そりや全くだ。お前が死んぢやッちや、外に知つてる者がねへんだからねへ、如何かして逢してやらなきやならねへが』と、魚久は鹿爪らしく腕を組んで『さア、何とか好い分別はねへかねへ。』

と、頻りに考へ込んだ。

〔八〕

一生の思ひ出に、今度の事に一生懸命になつて居るお近婆さんは、魚久が眞面目に考へてくれるのを見て、尠なからず心丈夫に思つた。好い考へがあるなしに抱らず、自分達の事に同情を寄せてくれると思へば、非常に心强かつたの

である。

『如何したものかねへ久さん。』

『さア、俺も考へて居るんだが、如何も、此方から押しかけて行つても、會つてくれないから困るねへ、那麼ことが若し殿様や御隱居に知れたら、大變なことになるんだから、會はないのも無理はないが、……何か好い考へがありさうなもんだが、はてね。』

と、魚久は鹿爪らしく首を拈つて、又沈思した。

『何にしても、此ま丶打ちやつては置けない、東京へでも歸られたら、眞逆後を追ふて行く譯に行かないから、今の内だわね。』

『さうだよ、今の内に會へる事を考へなまや不可ねへ、さアて、如何したものぢやらうねへ、外に出るにしても、此方黨のやうに一人で漂然と飛び出されねへ人間だから、誠に如何も仕末が惡い。』

『誰か、お女中さんでも知つて居るものがあれば、一寸言傳をしてもらうと、極く都合が好いのだがねへ、然う言ふ者はないかねへ久さん。』

『さア、そいつも如何やら險呑な話だ、若し殿様か御隱居に知れるやうなことがあつた日にや、大變だからねえ。』

『それも然うだが、私はね、あの時三百圓といふ大金を默つて今まで預つて居るが、本人が解つた以上、何日までも持つて居られない。一刻も早くそれが

返へしたいのさ。』

『そんな物はお前、何日までも持つてることはないぢやないか、婆さんの正直にも惚れたねへ、お滋坊を今日が日まで大きくしたんだもの、それ位のことは當り前だ。』

『イヽヤ、忘れて行つたお金を、默つて費はれるものかね、警察でもさう言はッしやたけれど、私は久さん、手提袋へ這入つてるまゝ、そつくり仕舞つて居るんだわね。』

と、お近婆さんは小聲で、魚久の耳へ口を寄せるやうにした。

『はゝゝゝは、固いねえ婆さん、それはお前が何といつても、眞逆先方で、今更取り返しもすめへが、兎に角、如何したら好い工合に逢はれるだらうねへどちらにしても、此方から出向いたんぢや逢へッこはねへ、何でも、先方から、お忍びでソッと來るやうにしなきやならねへ。』

『さうだよ。』

『いつそ、手紙でも一本、抛り込んで見ちや如何だらう、好く昔の事から詳しく書いて、只だの一度で好いから、お滋坊に逢つてやつてくれといやア、先方だつて腹を痛めた娘だから、眞逆嫌やだとは言ふめへぢやないか。』

と、魚久は考へ詰めた揭句、外には手段も策もないやうに言つた。

『さうだねへ、それなら一寸お滋に書かせりやお安い御用だが、若し殿樣に知

れるやうなことはあるまいかねへ。』

と、お近婆さんは躊躇の色を見せた。事實、若し子爵か母堂の時子に知れると秋子夫人に取つては由々しき一大事になるので、思ひ遣りの強いお近婆さんは何となく危まれたのである。

『大丈夫だよ、夫人様の宛名で遣りや外の人が見るやうな氣遣はない。然ういふことはなか〳〵固いもんだ。』

『さうかねへ、それなら誠に好い都合だが、思ひ切つて、然うでも仕て見るかねへ。』

『遣つて見ねへ、それより外には好い分別がない』と、魚久はきッぱりと斷言

して、稍や得意さうにした。

『さうかねへ』と、お近は一寸首を拈つて、直ぐ大事を思ひ出したやうに『それから久さん、夫人様の名前は何と言ふんだか知らないかね。』

『さあ、何とか言つたつけねへ、秋子、秋子とか言つたよ。』

『秋子！、では矢張り久さん、それに違ひないよ、お滋のお母さんに違ひないよ、手提袋の裏に秋子と書いてあるさうだから。』

『さうかい、では最う的確疑ひなしだ、早くお滋坊に手紙を書かして置きな、その變り、俺が言つたなんて事は、夫人様にも一切秘密だぜ、好いかい。』

『好いともね、言ふものかね。』

『ぢや、早く、成可く詳しく書かしな、お滋坊は學者だから、又好い工合に書くだらうせ。』

『それはねへ、私等よりやア、些たアね』と、お近婆さんは始めて得意の笑顔

『では久さん、忘れないやうに頼みますよ。』

『ア、、解つてるよ』と、魚久は威勢よく立ち上つて、軒下に置いてあつた荷に肩を入れ、年はとつても勢よく歸つて行つた。

お近婆さんはその方へは見向きもせず、上り框から急いで滋子の側へ行つて

『ねへお滋や、久さんはあゝいふんだが、思ひ切つて手紙を一本出して見やうかねへ。』

と、滋子の顔色を窺ふやうに、眤と瞶めて傍に座り込んだ。

『大丈夫でせうか、若し、夫人樣が、御迷惑遊ばすやうなことないでせうか。』

『さア、それを私も思つたのだけれど、久さんが大丈夫だといふから、遺つて見やうぢやないか、ねへ、外に何か好い思ひ付きでもあれば兎に角ないのだから仕方がないわな、若し愚圖々々して居て、東京へお歸りにでもなつたら何日又逢はれることか解るものぢやない。』

『妾最う、お顔をだけ見ましたから、那麽に逢ひたくありませんわ。』

と、滋子はお近の顔色を探るやうに、俛首いたまゝソッと見上げて、氣がなさうに言つた。

『何故えな、逢ひたくないことがあるものかね』と、お近は頭から彈ね付けるやうに言つて『これだけ生長くなつたのを見てもらはなきや、私が育てた甲斐がない、そして預かつて居る三百圓のお金を、お返へしゝなきや安心が出來ない。』

『だつて……。』

と、滋子は怫氣になつて居るお近の顏色を、和けるやうに微笑した。

『關ふことはないわな、手紙を書いて出して見やう、私が此所で言ふから、お前好いやうに、上手な手で書いておくれ。』

『さう？。』

『紙はあるかね、卷紙が好いかねへ。』

『卷紙もありますわ。』

『あるかい、それは丁度好い、では早い所を、ちよつくら書いておくれ。』

『はい、一寸待つて下さいな。』

と、滋子は机の抽出から卷紙を出して、墨を磨りながら婆さんの昔語に耳を傾けた。そして、幾度も筆に墨汁を含ませて居たが、とり留めもない長話は、何所から如何筆を附けて好いのか解らないので、とう〳〵一字も書かないで話を一先づ聞き終つた。

『斯ういふ譯だからね、その手提袋やお金を返へしたいのだから、それを好く

言つておくれ、解つたかね。』

『エ、、解るには解りましたけれど、下書をして見て、それから本統に書きますわ。』

と、滋子は筆の軸を咥へながら考へて居た。始めて、骨肉の母に手紙を出すのだから、充分文章に注意をしたいし、第一お近の話がゴタ〳〵して居て、順序が好く解らなかつたのである。

『さう〳〵、然うしておくれ、掻ひ抓んで言ふと、お金を返へしたいこと、お前に逢つてくれといふことだからねへ。』

『エ、』と、猶ほも滋子は想を錬つて、最初は紙片に下書して、やうやく次の

やうな手紙を書き終つた。

賤しき身をも省みず、ぶしつけに不束なるお手紙を差上げます不禮を、何卒お免し下さいませ、常に美しきみづくきの跡ばかり御覽じのお目にて、此拙しき玉章を見給ふては、さぞ御不審に思召すこと、お察しいたします

私事は、當羽田の街道で二十年前から掛茶屋を營み居る一人の老婆でございます。

先程貴女様方が、私共の店先をお通り遊ばしたとき弗とお顔を拜見いたしまして、十八年前の貴女様を思ひ出しました。定めて奥様もあの時のことを思ひ出し遊ばしたでございませう。私は、先程貴女様方が濱へ御出で遊ばして、沖の方をお眺めの時、十七八の娘を連れて行き過ぎやうといたしました婆でございます。そして奥

様、連れて居たあの娘は滋子と申します。

嗟！光陰は矢の如しと申しますが、過ぎ越し方を省みれば、全く疇昔のやうでございます。私は、貴女様が、産後の身をおいとひもなく、生れたばかりの赤ちやんをお抱き遊ばして、私共の處へお立ち寄り遊ばしました時のお姿を、いまだに判然と覺えて居りまする。

奥様、滋子と申します娘は、あの時お忘れになつた手提袋の中にあつた臍の緒の名前をそのまゝにつけて、私

がお育て申したお嬢様でございます。先程濱までお脊後をお慕ひ申しまして、たつた一言でも滋子か――と、お聲をかけて頂きたいと存じましたが、何しろお姑御様と御一緒のやうでございましたから、そのまゝ差し控へてお顔ばかり拜見いたしました。

奥様、滋子は貴女様のお腹を痛めたお嬢様でございます。凡て世の中に、自分の子ほど可愛いものはありますまいが、又本統の親ほど慕はしいものはありますまい。

本統の兩親を少しも知らない孤兒は、飢ゑて食ふ物を持たぬ乞食よりも一層哀れでございます。奥様、萬望一度で宜しうございますから、染々滋子にお逢ひなすつて下さいませ、最が婆の一生のお願でございます、決して幾度もお願ひして、貴女様の御身分に拘はるやうなことはいたしませぬ。そして、序に、お預りしてある手提袋を直接にお返へしゝたいのでございます。あのやうな大金の入つた品を、何日までも手元へ置きますのは、心配で

〳〵で、婆の命が縮むやうでございます。

何卒奥様、私の一生のお願ひをお叶へ下さいまして

お忍びでお出で下さいませ、大部昔とは村の様子が變りましたけれど、私共の店には、昔しながらの安燈が、「御休所」として軒にかゝつて居りますから、それを目印に、何卒、是非とも、一生のお願を、お叶へ遊ばして下さいませ、くれ〳〵もお願ひいたします。

掛茶屋の婆ゟ

奥様御許へ

「何だか拙いやうですから、最う一度書き直しますわ」と、滋子は筆を擱いて始めと終を見較べながら言つた。

「ア、結構々々、一變讀んで開かしておくれ。」

「だつて、まだ拙い所があるんですもの。」

「好いわね、さあ讀んで聞かしておくれ」と、お近婆さんは一膝躍り出て、心ばかり耳をつき出した。

で、滋子は仕方なささうに讀み出したが、文章の巧拙よりも、自分の果敢ない運命に感じて、時々聲が潤むのであつた。お近婆さんも身に染々と聞き終つ

て、

『ア、上等々々、好く出來た。早く封をしておくれ、ちよつくら私が入れて來る。』

『イ、エ、妾がお母さん入れて來てよ』と、滋子は叮嚀に封をして、右手に持つたまゝ袂に隱し、急いで表へ出て行つた。

〔九〕

御門子爵夫人なる秋子が、羽田の別莊へ來て以來、餘り外出しなかつたのは、お近婆さんが想像した如く、昔の罪惡が發覺するのを恐れたからである。

元々秋子は、此地に別莊を建てるといふことに、餘程迷惑と反對の感を持つて居たが、子爵が非常に好ましく言つたので、自分一人で反對を唱へることが出來なかつた。

又表面上反對すべき相等の理由が見出せなかつたので、仕方なく建てられるまゝに一言も口を出さなかつた。そして、いよ〳〵落成して、子爵と共に暑を避け、引き續ひて今日まで別莊で暮して居たが、元來秋子が反對したいと思つたのは、滋子の一件があるからのことで、金にあかした建築には何所に一つの缺點はなく、濱邊へ出ても西洋館の二階から見渡しても、東京灣の景色は實に見事であつた。

秋子は見るから貞淑な一箇の貴婦人であつた。年も分別盛りの三十五六で然かも外見ばかりでなく、隨分心ばせも優しい性質で、此貴婦人にして罪惡の隱し子があらうとは、誰一人として氣のつくものはない。若し事實を開かされたら、一場の座談として少しも信じる者があるまい、或は目を剝ぎ出して、驚倒せぬ者はあるまい。

秋子はそれ程貞淑であるだけ、內心で非常に悔いて居た。若氣の至りに、弗とした心の迷ひから、歩むべき道を踏み外した口惜しさ、最早や十八年前の昔と過ぎ去つて、あの茶店の婆さんも死亡なり、知る人もあるまいと思つて居ても、猶ほ何となく疚しくつて、餘り外出する氣になれなかつたので毎日書見をしたり庭を散歩したり、家の西洋館で沖を見渡す位のものであつたが、始めて姑の時子が來たので、外出は嫌やだとも言へず、濱へといへば濱へ、町へといへば町へ、言ふがまゝに案內しなければならなかつた。

その案內の途次を、お近婆さんが滋子を連れて濱邊まで慕つて行つたのである。秋子は、自分の顏を穴の開くほど瞶める二女を、何氣なく見返へつたが、忽ち胸を抉るやうな驚きを感じて、再び振り返つた時には、我ながら卒倒するかと思はれた。

『お姑樣、早く向ふへ參りませう』と、殆んど我を忘れて、俄かに早足で歩み去つたが、胸の動悸は何時までも納まらなかつた。あの時既に立派なお婆さん

であつたお近は、迚も今頃まで生きて居やうとは思はなかつたが、自分の想像はすつかり外れて、お近は昔のまゝであつた。

その事ばかりに心を痛めて居た秋子は、考へる時には顔の輪郭も姿も全然忘れてしまつて居たが、いざ逢つて見ると、一目見たばかりで、感電したやうに速に解つた。

『婆さんも生きて居た、滋子も生長なつて居た。如何したら好いだらう。困つたことになりやしないか知ら。』

と、秋子はいよ〳〵茫乎とした。あの濱邊まで後を追ふて來たらしかつたが、自分を滋子の母と知つてる以上、此先き如何いふことになるだらう。若し良人

や姑の耳に這入るやうなことがあつたら、名譽も身分も一時に廢れて、一命を捨てなければならない。

自分が犯した罪惡とは言へ、恐ろしい、口惜しい、嗟如何したら好からうかと、秋子は人知れず苦悶した。

『秋子さんや、あんたは如何かおしかね、大變顔色が惡いやうですよ』と、時子は終に秋子の落着ない態度を不審に思つた。

『イ、エ、別に……。』

『然うかね、如何も顔色が惡いやうですがねへ？。』

と、時子は左右の腰元を見較べた。

『左様でございますねへ』と、二人の小間使も、秋子の顔をぬすむやうにソッと見た。秋子の胸は譯もなく跳つた。自分の恐ろしい罪惡を、既に皆が知つて居て、態と氣を引いて居るのではあるまいかと、後暗い所があるだけに、解りきつた事だも自と氣が僻むのであつた。

『何ですか、先刻からわく〳〵いたしまして……。』

と、ソッと額を抑へた。

『餘り歩いたから、身體に障つたのだらう、さアさ、最う歸らうかねへ。』

と、時子は督見と秋子の力なげな姿を流し目に見て、小間使の手を引張つて、歸るやうにと相圖した。

秋子は、時子から半病人のやうに取り扱はれて、寧ろそれを好い都合にして別莊へ歸ると直ぐ自分の部屋へ引き籠つた。

『お寢み遊ばしては如何でございます、お藥をお召食りますなら、一寸、向井さんに診てお貰ひ遊ばして……。』

と、掛りの小間使として、永年秋子にかし付いて居るお園は青くなつて、最う醫者よ藥よと騒いだが、秋子は却つて五月蠅さうに、

『好いから彼方へ行つてお出で、暫らく斯うして居れは直ぐ快くなるのだから診てもらはなくつても好いの。』

『でも奥様……。』

『大丈夫だよ、暫らく彼方へ行つて〻おくれ。』

『左様でございますか。では……。』

と、お園は殘り惜し氣に、止むなく立ち去つた。その脊後姿を見送つた秋子は小間使の姿が次ぎの間へ消へると同時に、虹のやうな太い溜息を洩してぐつたりと俛首れた。

『本統に、知つて居たのか知ら……。』

と、先づお近が自分を覺えて居て、態々後を追ふて來たものか、或は遇然に見掛けて、好く似て居るとでも思つて、あんなにつく〻と瞶めたのか、なかなか直ぐには斷定し得なかつた。

一方では非觀的に、故意に後を追ふて來たのと解し、又他の一方では遇然だと解して、幾等苦悶して考へても、判然たる結論を得ることが出來なかつた。

その夜なぞは碌々寢もしないで考へたが、素より想像は判然たる結論を許さないので、那麽ことに惱んで居るよりも、お近や滋子に遠ざかることが第一の急務だと思ひ付いた。それには子爵を提して、一日も早く東京へ引き揚けるのが肝要である。

子爵が直ぐにも引き揚げるやうな、何か好い口實はないかと、猶ほも秋子は考へつめた。加減が惡ひといふのを口實に、翌日も翌日も、疑と自分の部屋へ閉ぢ籠つて、人知れず思ひを凝して居た。

そこへ、お近からの手紙が來たのである。秋子は見覺えのない手跡を、不審さうに打ち返へし〳〵見て、除々に封を切つたが、中の本文を四五行讀んで、愕然として慌てゝ片傍に隱し、聞き耳を立てるやうにして、室外の樣子を窺つた。

けれど、人の跫音も話聲もしなかつたので、再び手紙を擴げて、恐ろしい物でも見るやうに、胸を跳らしながら讀み下した。目には自然に涙が湧いて、時〳〵太い溜息が遣る瀨ない胸から流れ出た。

『胡麽ことなら、あの時死ねば好かつた……。』

と、胸を搔きむしりたいやうな後悔、頽然と氣が拔けたやうに俛首れて、考へ

るともなく考へて居たが、思案に餘る涙が止め度もなく慘出て、ツルリ〳〵と頰を流れるのであつた。

秋子だとても、無論親子の愛は好く知つて居る。自分の腹を痛めた娘に、逢ひたいのは山々であるが、若し此事が世間に知れては自分が世間へ顏出しがならぬばかりでなく、御門子爵家の大なる耻辱で、ひいては里の黑澤家の瑕瑾である、頑固一徹の父は、又腹を搔き斬つてお詫びをすると言ひ出すかも知れない。

然し、斯ういふ手紙を寄來すからには、最早や自分が滋子の母であることを知つて居るのだから、此まゝ打ち捨てゝ置いたら、逢はしてくれと言つて押し

かけて來るかも知れない、來られては大變である。

と言つて、先方の要求通りに、自由に尋ねて行くことは出來ない。假令へ一人で外出するとしても、又誰に見られないとも限らない『如何したら好からうか』と、秋子は途方に暮れた。智慧にも分別にも窮し果てゝ、結局生母の增代に相談するの外はないと、やう〳〵決心して里の生母へ宛てゝ一本の手紙を認めた。詳しい內容は拔きにして、至急にお願ひしたいことがあるから、此手紙が着次第、久々でお伺ひといふ積りにして來てくれと言つてやつた。

〔十〕

手紙を出した翌々日、生母の增代は御門子爵の別莊を訪れてくれた。丁度姑の時子も來て居るから、年寄同志で大部話がはずんだが、增代は手紙の事を氣にして居たのと、秋子が加減が惡いと聞いて、兎に角急いで部屋へ見舞ふた。

秋子は全くの病人になつて、床の上に起き直つて茫乎して居た。

『加減が惡いさうだねへ、什麼だね。』

と、增代は心配さうに、靑褪めた顏を見守つた。今年六十二だといふのだけれど、頭髮も餘り白くなく、小ぢんまりとした小さい丸髷に結つた姿は。如何に

も壯健しく見へた。

『別に、如何ッて事もないのですけれど……少し心配事がありますの。』

と、秋子は寢衣のまゝ立ち上つて、緩んで居た帶を締め直した。

『まア、好いから寢てお居で、何たか大變顏色が惡い。』

『何でもないのですの、只だねへ、考へて居ると、氣がクサ〳〵して、人樣に顏を見られるのか苦痛うございましたから、斯うして引き籠つて居りましたの。』

と、秋子は僅かばかりの笑を浮べた。自分一人では解決が出來ぬ大事でも、生母の智慧を借りれば必ず解決するやうに思はれて、少なからず力を强ふしたのであつた。

秋子の實父は黑澤正直といつて、維新前は某大藩の家老を勤めて居たが、實に頑固一徹の武士氣質の爺で、丁度今より十八年前、秋子が弗とした心の迷ひから、自邸に寄宿して一高へ通學して居た、今井憲二といふ同藩士の息子と私通し、滋子を腹へ孕つた時なぞ、家祖傳來の一刀を持ち出して、一刀兩斷にすると敦圉いた位、やう〳〵增代が取り成しで、手討だけは思ひ止つたが「元の通りの身體にならなければ、片時も家へ置くことはならん」と言つて、衝き出すやうにして家を追ふた。互ひの戀を叶へてやらうなぞとは以つての外、今井憲二も卽刻邸を逐ひ拂はれて、再び見向きもしなかつた。

世間知らずの秋子は、二十才になつたばかりの娘の身で、人目に立つ大きな腹を抱へて家を追ひ出されたので、最早や是れまでと覺悟をして居たが父に引きかへて物優しい生母の增代は、痩せ細るほど心配して、蔭へ廻つて種々と面倒を見てくれるので、秋子は心ならずも死を思ひ止つて、言はるゝまゝに或る助産婦の家へ寄偶し、やうやく滋子を產み落したのであつた。

けれど、產み落して又其滋子の處置に困つた、秋子は折角母の慈愛によつて一命は助かつたやうなものゝ、子供を抱へては歸ることが出來ない。母に相談したいと思つても、父が目を剝いで母の擧動に注意して居るので、金子を送つてくれるやうなものゝ、逢つて染々相談することは出來なかつた。秋子は全く

途方に暮れた。

そして、又もや死を決して、フラ〳〵海岸の方へ行つて、計らずもお近婆さんの茶店へ腰を下し、滋子の養育を托する氣になつて、それなり置き去りにしたのであつた。

……斯うして秋子は、母の取り成しで再び黑澤家へ歸つて、以後は只管品行を愼んで居たが、狹いやうでも世間は廣いもので、斯ういふ大秘密を持つた秋子が、御門子爵にその美貌を見込まれて、二十二才の春、芽出度輿入れしたのである。

『如何してさ、何か、心配ごとでも出來たのかね、――此手紙着次第といふ手

紙だつたから、私しや本統に心配して來ました。』

と、增代は小聲で聞きながらすり寄つた。

『何日々々、御心配ばかりかけまして、申譯がございません』と、秋子は目を濕せて頭を屈めた。

『好いわね、那麽ことは好いけれど、如何かしたのかね』と、增代は如何にも心配さうである。その顏を凝と見上げた秋子は『お生母さん』感情的に呼びかけて『あの時の娘が、つい近くに居りますの』と、小聲ながら驚異の目を見張るやうにして言つた。

『あの時の娘とは……。』

と、增代は話が餘り突然なので、それだけでは想像し得なかつた。尤も十八年前の事だから、直ぐそれと思ひ出せなかつたのも無理はない。

『あの、茶店へ捨てた娘なんですの。』

『茶店へ？』と增代は鸚鵡返しに惘れて『あの今井の、あの娘がかい。』

『はい。』

『まア、何所に、如何して解つたの。』

『これを、お讀み下さいませ。』

と、秋子は蒲團の下へ隱して居た手紙を出して、生母に渡すが否や寢衣の袖を顏に押しあてゝ、聲を殺して歔欷いた。

増代は心もとない目で一通りずつと見て、

『まあ、然うかね、それは困つたねへ……。』

『如何したら宜しふございませうねへ、妾、心配で〳〵……。』

『さうだらう、あの時、お父さんが頑固を言はないで、今井へ入嫁きさへすりや斯麼ことはないのだけれど、無理無體に此家へ入嫁けて、飛んだ心配をするねへ。』

『イ、エ、妾は、妾は惡いのでございますから、什麼目に逢つても仕樣はありませんけれど、若し此事が解つたら、お父樣が當家へ對して、惡からうと思ひますて。』

『さうだよ、だから私は、あの時反對したのだけれど、お父樣ときたら、頑固で仕樣がない』と、秋子びいきの増代は、秋子の罪惡を責めるよりも、連合の正直翁を惡く思つて居た。此樣子では、打ち遺つて置いたら又何とか言つて來るだらうねへ、惡いことは出來ないもので、此所へ別莊を建てるといふのからして不思儀ですねへ。』

『……。』

秋子は恐ろしい罪惡の繩で、全身を締めつけられるやうな苦しさを感じて、太い溜息を吐いた。

『然し、あの娘も不愍な娘だ、大きくなつて居ましたらうねへ。』

『エ、。』

『丁度十八になるから、然うだねへ、最う好い娘だらうねへ。』

と、遉かに增代は懷しさうに言つた。

『お生母さん、如何したら宜しうございませうかねへ。』

と、秋子も實は我娘に對する恩愛に、名譽も置位も打ち捨てゝ、滋子と一緒に深山の奥へでも隱れ住みたいやうな氣になつて居た。

『さあねへ、お前も逢ひたからうけれど、逢ふと却つてお互に不可ないからいつそ私が茶店へ行つて、好く因果を含めて婆さんに賴みませうよ。』

『然うでございますかねへ、誠に御面倒ですけれど……。』

『イ、エな、私は何も關やアしない、ではねへ、當家を早くお暇にして、歸りに茶店へ寄つて、何ならその滋子といふ娘に、一生遊んでも食べられるだけのことをしてやつて、東京へでも引移らしてしもうわね。』

『さうでございますねへ、然うして頂けば、本統に安心が出來ますわ。』

と、秋子は始めて吻とした。

『好いともね、安心してお居で、私が屹度好いやうにするからねへ。』

秋子思ひの增代は、何所までも庇護うて、少しでも心配させまいと努めた。

骨肉の親の有難さ、秋子は生母の有難さを思ふと同時に、滋子の不幸を思ひ遣つて、熱い涙を止め度もなく流すのであつた。

〔十一〕

増代は、秋子の部屋を出て、暫らく客間で時子と四方山の話をし、西洋館なぞへも行つて邸内を悉く見た上、やうやく暇を告げて辭し去つた。老體を氣遣ふて是非送り届けるといふのを無理に斷つて、穴守様から川崎へ廻るかも知れぬと言つて、呼んでもらつた車に乘つて門を出るには出たが、秋子に聞いたお近婆さんの手前で車を乘り捨てゝ、テク〳〵聞いた通りに目印の角安燈を探しながら行つた。

六十二とはいつても、まだ五十臺にしか見へぬ達者さで、若い者にも劣らぬ

つしかりした歩調、右と左を見交しながら、物の一二丁歩るく内に、やうやくお休所の角安燈を見出した。

此所だと思つてずつと這入ると、お近婆さんは土間の片隅で野菜か何かを拵へて居た。年は慥か増代より十ばかり上なのだが、苦しい生涯を通して來たいけに、見較べて見ると大變な相違であつた。

『これは〳〵、入來つしやいませ、萬望お掛けなさいませ、今日はまあ結構なお天氣樣で好い鹽梅でございましたねへ。』

と、お近婆さんは穴守參りのお客だとでも思つたらしい、手を前掛で拭きながら、口癖のやうなお愛嬌を言つた。

増代は却つて迷惑さうに、

『あの附かぬことを聞きますが、當家に滋子といふ娘さんがありますか』と、奥でお針をして居る滋子を見ながら聞いた。奥といつても六疊ばかりの一間ッきり、裏の障子が開いてるので、朽ちかゝつた竹垣まですつかり店から見通されるのである。

『はい。』

と、お近は案に相違したやうな顔をして、不審さうに増代を瞶めた。

『オヤ、それでは矢張り當家でしたか、私はね』と増代は一段と小聲で滋子の祖母ですよ。』

『へ……』と、お近は驚いて同じく聞きとれやいやうな小聲で『それはまア、それはまア好くお出でなさりました。此所ではお話が出來ませんから、穢い所でも、萬望御隱居樣、奥へ……。』

と、俄に目障の物を手早く片づけるやら、慌てゝ滋子にも仕事を片づけるやらして、奥へ案内して障子を締めきつた。

『これは、入來つしやいませ。』

と、お近婆さんは又改めてクド〳〵しい挨拶をした。滋子も片隅に畏つて、慇懃に頭を下げるのである。

『大きくなりましたねへ、嘸ぞまあ是れまでには、隨分骨の折れたことでせう

好く育てゝ下さいました。少し事情がありまして、手元へ置くことが出來ませんので、可愛さうに、貴女のお世話になるやうなことになつたのですが、孫は子よりも可愛いと、よく世間で言ふ通り、私には初孫ですもの、そりや最う可愛くて何かにつけて忘れたことはありません、萬望、無情の者ぢやと思ふて下さるなよ。』

と、增代は話す内からハンカチを顔にあてた。默つて俛首いて居た滋子の目からも、熱い涙が滴つた。

『はい〳〵、それは最う御尤樣のことでございます。』

と、お近は悼み入つて同じく涙に濕れた目を幾度も連瞬いた。

『あのやうなお手紙を差上げまして、申譯がございませんが、私も御覽の通り最うとる年波で、永いこともありませんから、成らうことなら目の黑い内に、一度お目にかゝつて頂きまして、行末のお力になつて頂きますると、此娘も大邊心强からうと思ひまして、お願ひいたしましたやうなことでございます。若し私が此の儘死んでしまいましたら、此の娘は孤兒になるのでございます。』

『オヤ、それでは、貴女は子供がないの。』

『はい、あるには一人伜がございますが、やくざ者で今は行方も知れません。』

と、お近は又もや涙を拭つた。

『まあねへ。それは氣の毒な、それでは滋子が、餘程孝行をしなきや不可ませんよ。產の親が親の義務を果たさなかつた變りに、此方のお婆さんに一方ならぬ厄介になつて、胡麽に大きくなつたのだからねへ。』

『はい』と、滋子は從順に頭を下げた。

お近婆さんは二女の横取りするやうに、

『イエ御隱居樣、矢張り血統といふものは爭はれぬもので、此娘は伴に引き替へて、それは最う孝行にしてくれます。そして貴女、四年前でございました か、縣廳のお役人樣のお見出しになりましてね、澤山御褒美を頂きました上無費で女學校へ入れてくれましてねへ、此春卒業いたしましたばかり、イヤ

最う迚も此婆に娘には勿體のうございます。』

『オヤ、それは感心ですねへ、不運な兒ほど怜悧いものですが、それといふのもお婆さんの育て方が好いからです。』

と、增代は全然感心してしまつて、成らう事なら此可憐な孫を、邸へ引き取つて、出來得るかぎり可愛がつてやりたいと思つた。見たところ餘り裕福な暮しでもなさうだが、何となく氣品が高くつて、然かも秋子に生寫の面差が、懷しくつて堪らなくなつた。

『ねへ滋子さんや、お前はお母れんをお怨みかも知れないが、お母さんは、身から出た錆とは言ひながら、お前を斯うするまでには、隨分悲しい思ひをし

ましたよ、萬望、怨まないでやつておくれ。』

『はい、決して、お怨み申しはいたしません。萬望、妾のこと、御心配遊ばさないやうに、お祖母様から、好く仰有つて下さいませ。』

と、滋子は又新らしい涙を流しながら、しつかりした口調で判然言つた。

『おう〳〵、好くお言ひだ、それでこそ、お母様が聞いたらさぞ喜ぶことでせう……。』

と、増代も涙を流しながら、秋子が滋子を孕むでからのことや、頑固一徹の良人正直翁に就いて、永い物語をした。

熱心に聞いて居たお近婆さんは、しみ〴〵と身に染みるやうに感心して、頻

りに感投詞を入れて居たが、

『如何も〳〵、お氣の毒なお方でございますねへ、私共は決してお怨み申すやうなことはございません。何にも存じませんものでございますから、胡麻所へ來て頂きたいと申し上げまして、嘸ぞ御迷惑でございましたらう、萬望まあ、お免しなさつて下さいませ。』

『イヽエ、然う言はれると、此方で又挨拶に困る、お手紙がなくても、疾くに來なければならぬのに、打ちやつて置いて、何とも早や申譯がありません。何れ其内には、秋子も逢ひに來まするから、今暫らく待つて居て下さい。』

『はい〳〵、萬望最う貴女様、お氣遣ひ下さりまするな、若し奥様のお身の上

に、御迷惑でも出來ましては、申譯がありませんから』と、お近婆さんは益〳〵悼み入つて、ペコ〳〵頭ばかり下げて居たが、弗と何やら思ひ出したやうに立ち上つて、塗りの剝げた古箪笥から、秋子が殘して行つた手提袋を出して來た『あの是れは、奥樣がお忘れになつた袋でございますが、中に大金が這入つて居るやうでございますから、大切にお預り申して居りました。』

と、二昔前の手提袋を增代の前に出した。

『あらまあ、何て固いのでせう、それは滋子の養育費……と言つては、迚も足りさうもありませんが、ミルク代にとでも思つて置いたのでせうよ、萬望、滋子に帶の一本も買つてやつて下さい、まあ珍らしい律義な……感心ですねへ。』

と、增代は全く感じ入つた。

『でも貴女、胡麼に澤山頂きましては……。』

『まア〳〵、それは萬望そのまゝにして』と、强いて押し附けるやうに言つて、

『最う一ッお婆さんに、お願ひがあるのですがねへ。』

と、質朴さうなお近の顏を瞶めた。

『はい〳〵。』

『外でもありませんが、今いふ通り、若し此事が御門家へ知れましたら、秋子は申すまでもなく、良人が御門家へ對して申譯がないことになるのですから

決して誰にも、口外なさらぬやうにお願ひいたします。そして、成らう事なら、當地にはあゝして別莊が出來ましたから、同じ土地では猶ほ更噂がたち易いから、東京へ引き移つて頂きたいのです、さうすれば、私もちよい〳〵遊びにも行かれるし、東京なら廣いから、秋子が稀に寄つたからつて、噂がたつやうなこともありますまいし、どちらも都合が好からうと思ひますが、然ういふことにしてもらう譯には行きませんかねへ、承知さへして下されば二人が樂に食べられるやうに、煙草店でも出すことにしますがねへ、如何いふものでせうかねへ。』

『那麼ことを貴女、して頂いては申譯がございません。』

『イエ、私の方で都合が好いから、賴んで然うして貰ひたいんですよ。』

『左樣でございますか、お宅樣の御都合なら、什麼ことでもいたしますけれど……。』

『お願ひですから、お嫌やでも萬望さうして下さい、私も近い所に孫が居ると思へば、何より樂みです、それでは、早速歸つて、店を出すやうに運びますからねへ、その積りにして居て下さいよ。』

『はい〳〵、何から何まで、如何も相濟みませんことで』と、お近婆さんは只だペコ〳〵頭ばかり下げるのであつた。

〔十二〕

生母に逢はれるかと思つて居た滋子とお近婆さんは、計らずも祖母の増代にあつて、包み隠さず一部始終の事情を聞いたので、却つて胸が一時に開いた。

然かも生母は某大藩の家老職の娘で、父は同藩士の子息だから、氏素性としては立派なもの、その上東京へ店を出させて、生母にも祖母にも時々逢はれるやうになるのだから、實に願つたり叶つたりである。

お近婆さんもそれを非常に喜んで、毎日のやうに、有難い〳〵と口癖に言ひながら、今日は通知があるか明日は音信があるかと、首を長くして待ちきつて

居た。

増代もお近に逢ふまでは、如何いふ難題をかけられやうも知れぬと、少々恐れを抱いて居たが、逢つて見ると、成程手紙の文面にあつた通りの律義者で、十八年間といふもの、手提袋の金に事實手を附けない正直な婆さんだから、すつかりそれに惚れ込んでしまつて、早速東京で小綺麗な店を持たせることに決心したのである。

その樣子を増代から報知された秋子は、誰よりも烈しく喜んだ。煩悶の餘り床に就く程の氣弱い性質だけに、喜びも又、一通りではない、人知れず母の在ます東京の方へ手を合せて、嬉し涙を流すのであつた。

つまり、今度の事に就いては、三方四方が非常に滿足したのである、が昔から寸善尺魔と譬にいふ如く、誰が何所から聞き出して、噂し始めたものか「御門子爵の奥樣は、角安燈のお近婆さんの拾ひ娘の母親ださうな」と、知るも知らぬも、寄ると障ると一つの新しい奇談として噂しあつて、また〳〵内に界隈の評判となつてしまつた。

如何に燈臺下暗し、町内で知らぬは亭主ばかりなりといつても、此噂は何所からともなく、御門家の人々の耳にも入つた。そして、終には、子爵を始め母堂の時子の耳にまでは入つたのである。眞逆と思つて樣子を探らして見ると、元より骨肉の母娘だから、如何にも好く似た容貌で、これと聞かなくつても一

目瞭然であつた。

子爵も母堂も非常に驚いた。綺量を望んで無理に貰つた秋子を、今更飽きもせぬ仲であるに抱らず、斷然離別しなければならぬといふことは、實に堪へがたい苦痛であつた。

『何故、然ういふ罪惡を、あの美しい顏で包んで居たのだらう』と、子爵は如何にも口惜しく思つた。然し、幾等口惜がつても、事實は如何することも出來ないので、表向きに離緣談を黑澤家へ申込んで、それと同時に、秋子一人を別莊へ殘して、子爵も母堂も早々本邸へ引き揚げた。

黑澤家では、素より覺えのない事ではないから、此離緣談に就いては一言の

苦情をいふことも出來なかつた。若し是れが、事實に相違した言ひ懸りであらうものなら、元より頑固一徹の正直翁の事だから、おッ取り刀で御門家へ乘り込むのだが、如何せん全くの事實で、然かもその事實を詐つたのは自分である けれど、斯うなると自分の惡い事は棚へ上げて、十八年前の秋子の無分別が癪に障つた。

世間の淫奔者の般鑑に、且つ御門家への申譯に、秋子を斬つて自分も同じ刄に僵れるの外はないと、例の家祖傳來の一刀を、錦の袋のまゝおッ取つて、六十七の老體だが、癇癪まぎれに止めやうとする妻の增代を突き退けて、一目散に飛び出した。丁度伜の正隆は外出中で、嫁と增代では如何することも出來

なかつた。

子爵は、斯ういふことを本人に早く知らしては、如何いふ間違が出來るかも知れないと思つて、且つ秋子に對する最後のお情として、少しも事實を知らせなかつた。

秋子は自分も早く本邸へ歸りたいと思つて、子爵からの通知を待つて居たが不思儀なことには釣瓶落しに晩れかゝつた秋の夕方、滅多に來たこともない實父の正直が、恐ろしい權幕で來たといふお園の知らせに秋子は變だと思ひながら、玄關の方へ出て行くと、成程父の正直が、家祖傳來の一刀の柄を、錦の袋から覗かして、應接を命じられて居た家令の松原金之進と、血相かへて押問答

をして居る。

『お言葉に從つて、秋子を迎ひに參つたのだから、早く娘の部屋へ案内をして下され。』と、言ふ語調が何となく殺氣を帶びて居るから、金之進は青くなつて、

『御案内はいたしまするが、萬望、穏やかにお願ひいたしまする。さういふ品をお持ち遊ばしては、誠に私が困りますから、萬望それは、私にお預けを願ひます。』

と、正直翁が片脇におッ取つた刀を取らうとする。

『イヽヤ、これは少々必要があるのぢや、早く娘の部屋へ案内するか、但しは

此所へ連れ出して下され、不都合を働いた娘を、黒澤正直がお引取申すのぢや。』

『でござりますなら、如何ぞ、そのお品だけを……。』と、暫らく互ひに爭つて居たが、其所へお園の通知せによつて、不審に思ひながら出迎へた秋子、正直翁は一目見るや否や、

『オヽ、娘か、己れは家名をきずつけた淫逸者、御門子爵への申譯に、十萬億土へ連れ歸りに參つたのぢや、覺悟をしろ』と、言ふが否や金之進を衝き退けて、家祖傳來の名刀をズラリと鞘を拂つた。

『エッ！』と、ばかり、秋子は餘り突然なので二の句は出ない、氣でも狂つた

のかと驚いて、蹌踉くやうに後方へ身を引いた。

『危い！、お待ちなさいませ、お待ちな……。』と、衝き退けられた金之進が、命がけで背後から執固抱き付いた。

『放せ、放してくれ、子爵を欺いた私や娘に、情があつたら永く生耻曝さしてくれるな、子爵への申譯に、父娘とも〳〵一ッ刀に伏して相果てるのぢや、放せ、エ、放せ！。』

と、正直はやつきになつて振り拂をうとしたが、七十に間のない老體なので、金之進一人を振り拂ふことが出來なかつた。

秋子は始めて滋子の事が發覺したのだと悟つて、子爵が自分一人を殘して本

邸へ歸つたことも、自分に對する態度が幾等か變つて居たことにも思ひ當つて眞青になつて身顫ひした。

それとは知らず、今の今まで、生母の知らせを喜んで、滋子が東京へ移轉る日を待つて居たが、何故、誰の口から斯うも早く子爵の耳に這入つたのだらうと、殆んど信じられぬほど不審であつた。

いよ〳〵事が發覺した以上、成程父が良人へ申譯がないと仰有るのも無理からぬこと、それよりも猶一層申譯がないのは自分である。あれほどお愛し下さる良人を永い間欺いて居た不埒な身、思へば父の刀にかゝる位は愚かなこと嬲り殺しになつても犯した罪の補ひにはならぬと思つた。

『お父様、何とも申譯がございません、良人への申譯には、妾が獨りで死にまする。』

と、小褄を取つて表へ飛び出した。金之進は狂人のやうになつた正直翁に抱き付ひて居たが、打ち捨て置いては私子の身が大變なので、

「ヤア奥様を、奥様を、お止め申せ。』

と、お園や下女下男に命じながら、自分も共に脊後を追ふとした。で、正直翁は身體が自由になつたので、自分も同じく秋子を追ふと思つたが、何しろ足腰が意のまゝにならぬ老齢なので、最う是れまでと思つたものか、我と我腹へグサと一刀を突きさして、ヨロ〳〵と蹌踉いて式臺にドンと尻餅をついた。

と見た金之進は『ヤッ、これは』と、直ぐ引き返つして『早く、誰か、醫者だ〳〵』と、秋子を追ひ行く下女下男を呼び立てた。

「イヤ、醫者は呼んでくれるな、これが、せめてもの、子爵への詫びざや。』

と、正直翁は苦しさうな息づかいはして居るが、心は常の如く確固であつた。

ウーンと下腹に力を入れて、脇腹からヂリ〳〵と刀を引き廻した。

「まアま、お待ちなさりませ、お待ちなさりませ。』と、金之進は顫ひ聲で、頼むやうに言つて止めるには止めたが、刀をもぎ取ることが出來なくなつて一人はら〳〵して居る。

「と止めるな、止めてくれるな、子爵へな、黒澤正直が、一命を捨てゝ、お詫

びをしたと、つゝ傳へてくれ。』

『イエ、そのやうなこと遊ばしては、却つて、却つて子爵が迷惑いたします、萬望、お手を、お手をお緩め下さいませ。』

『エゝ、止めるな、武士に生耻かゝしてくれるな。』

と、吟とやうに言ふかと思ふと、血糊がべッとり附いた刀を拔き取つて、傷口を左手でしつかと抑へ、鋒先を眤と瞶めたまゝ、二三度肩で大息をして居たがウムと呻いて咽喉佛へ美事にグサと突き徹した。

〔十三〕

父に斬られるにしても、自から咽喉を搔き斬るにしても、死を決した身には少しの恐怖もないが、別莊を罪惡の血潮で穢しては、不都合の上の不都合だから、秋子は慌てゝ表へ駈け出して、何所か他人の迷惑にならぬ所を、死場所にしやうとしたのである。

跣足のまゝ一生懸命に駈け出したやうなものゝ、四邊りには小間使も金之進も居たのだから直ぐ脊後を追ふて來たが、正直翁が割腹したので、驚いて金之進が後方へ取き返へしたから、秋子は小間使のお園に追はれながら、町の方へバタ〳〵走つた。生れて始めて、素跣足で土を踏むだのだから、足の裏に砂利の角が當つて、皮膚が裂けるやうなのだが、纖弱い女でも一生懸命になれば偉

いもので、始んど痛さを感じなかつた。

晩かけた秋の夕邊は、何時の間にかトップリと晩れて、曇りがちの空には星も數へるほどしかなく、家々の戸を洩る灯もまばらで、家並を離れた街道は、衝き當らなければ何も見へぬほどであつた。

『誰何か、誰何か止めて下さい、止めて……。』と、お園は主人の一大事と、一心に後方を追ひながら、他人の助けを呼んだが何しろ走つて居るのだから息が詰つて聲らしい聲が出なかつた。

それより半丁ばかり隔つた秋子は、やうやく街道から濱邊へ出て、愴惶しく小石を捨つて、双の袂へ入れるが否や、打ち寄せ打ち返へす波の中へ駈け込んだ。けれど、此邊は一帶に遠淺なので、全身がひたるやうになるまでには、大部沖へ走らなければならなかつた。

其所へお園が駈け付けた。裾を高々と卷くし上げて、バタ〳〵水を彈ねながら、着物の裾を濡らして歩みかねて居る私子に追ひ付いた。

『奥様！。』

と、腰にひしと抱き付いて暫しは言も言はず苦しい息を吐いた。

『オヽお園、放して、放して萬望殺しておくれ。』

『イヽエ、放しません、放しません。』

と、お園は益々齒咬み付く。

『お園！』と、秋子は鋭く呼びかけて、力を込めて振り初らうとしたが、何しろ一生懸命に抱き付いて居るので振り切ることが出來なかつた『お前は妾を苦しめるの、妾を苦しめたいの。』

と、口惜しさうに齒を喰ひしばつた。

『イヽエ、さういふ譯ではございませんが、萬望お氣をお靜め遊ばして、思ひ止つて下さいませ。』

『氣は靜つて居るわ、氣が狂つて自殺するのぢやないの生きて居ては、良人へ對しても義理が濟まず、第一世間へ對して顏出しがならないから……ねへ、ようく道理を聞き分けて、放しておくれ、さあ、お園。』と、秋子は今更のやうに熱い涙をハラ〳〵と流した。

『放しませんわ、何と仰有つても放しませんわ、萬望思ひ止つて下さいませ、什麼理由がおありなさるか存じませんが、お死に遊ばさなくつても濟むぢやありませんか。』

『死なないで濟むことなら、何も無理に死たくはないのだけれど、如何しても生きて居られないのだから、さアお園、後世だから放しておくれ、さアお放し！。』

と、秋子は必死になつて振り拂ふとした。お園は何所までも止めやうとする。寄せては返へす波に脚を洗はれながら、二人は互に力をこめて爭つた。

沖は一面に眞暗く、稀にチラ〳〵見へる漁火が、白い浪間に漂ふて、船幽靈の仕業かと思はれるやう、夜の海は、何となく妖氣に滿ちて居た。

『誰何か來て下さい、誰何か來て下さい』と、お園は力が及ばなくなつて、聲をかぎりに叫び出した。

『これお園、お前は何故さう妾を苦めるの、妾の爲めを思つてくれる氣があつたら、萬望後世だから放しておくれ、さあ人が來ない内に早く』と、秋子は慌てゝ突き退けた。

愚圖々々して居て、若し死はぐれたら耻の上の耻だと、一生應命にお園の手を振り切つて、バタ〳〵と沖の方へ走つたが、濡れた着物の裾が脚へまくれ附

くので、終にバツタリ水煙を立てゝ仆れた。それと見たお園は、直ぐ引き起して、又もや執固と手を取つた。

此二女の爭ひを、街道の通行人が聞き付けて、闇を透しながら來てくれた。車夫らしい男である。

『危ねへ〳〵、無分別をするもんぢやねへ。』

と、脊後から出し抜けに、二女を一緒に抱き締めて、眤と透すやうにして顏を見較べた。

『萬望お助け下さいませ。』

と、お園は車夫の手を拔けやうとしたが、車夫もその樣子で、大丈夫だと思つ

たかして、秋子一人を確固と抱きしめた。

『放して下さい。放して……。』

と、秋子は益々やつきになつて、振り拂はふとしたが、對手は荒くれ男の車夫だから、身動きさへも出來ればこそ。

『不可ねへ〳〵、氣を落ち着けて好く考へて見なせえ、死なくつても世の中の事は埒があくもんだ。一體如何いふことか、事情を聞いた上で、及ばずながら力にならうぢやねへか、ねへ姐さん、一體如何したんだい。』と、車夫はお園を顧みた。

『お放し下さい。幾等貴方が力になつて下すつても、妾は生きて居られない理

由があるのですから。』

『さア、だからその理由を聞ふじやないか。』

『イ、エ、お話しても、無駄ですから……。』

『何故だい、乃公が斯ういふ貧乏人だから、理由を話しても仕様がねへといふのか、おい、莫迦にするな、さア來い、濱へ上れ。』と、車夫は喧嘩腰になつて、小脇にひつ抱へたまゝ、浪を蹴つて、急いで濱へ抱き上げた。自分の親切を無にせられるのが、たゞ譯もなく癪に障つたのだと見へる。斯うなると、道が女の身の、秋子は強いて拒みも出來ず、一時に湧き來る悲しさに、慌てゝ袖を顏に押し當てた。

『サア、街道まで來なせえ、乃公で埒が明かなきや、旦那に頼んで何とかして もらうさ、大體旦那が聲を聞きつけて、助けて來いと仰有たつたんだから、眞逆知らねへと言ふ氣遣はねへ、一寸立派な方だから、屹度如何にかして下さる。』

と、車夫は荒々しい口調ではあるが、宥め賺かせるやうに言ひつゝ、お園と二人掛りで秋子を街道まで誘ふた。

客らしい洋服の紳士は、それと見て『如何した〳〵。』と、二三歩歩み寄りながら、闇を透かして聲をかけた。

『危い所でした、最う一足で旦那、やつつけてしまう所でした。』と、車夫は手柄さうに、威勢の好い返事、秋子は今更のやうに空耻しくなつて、行かじと力を入れて立ち止つた。

『後世ですから放して下さい。』

『莫迦ア言ひねへ、まだ強情張るのか。』

『どうぞ、お願ひですから……。』

『冗談言つちや不可ねへ、さあ、歩るかねへか』と、車夫は一層力を入れて、終に車の所まで連れて行つた『イヤ如何も、恐ろしい強情な女だ。』

『二人かね。』と、紳士は二女を覗くやうにした。暗いから好くは見えないが、四十格好の、立派な紳士である。

『ナニ、一女は止めて居たんでがす。』

『母娘かね。』

『サア、』と、車夫は額の汗を拭いながら、地上に倒れた秋子と、それを勞はるお園とを見較べるやうにして『ネイ、お前さん方は母娘なのかね。』

と、訊ねた。

『イ、エ……。』

と、お園は迷惑さう。

『ぢや何だい？。』

『……。』お園は明白に言つては、子爵家や秋子の名譽に關すると思つて、これ以上たち入つた質問をせられたら、何と答へたら好からうかと、少なからず當惑して、返事もなくたゞモジ〳〵して居たが、

『まあ好い〳〵、何家かへ連れて行つて、着物の仕末でもして、事情は緩然聞くさ、大部濡れてるやうぢやないか。』

『エ、、裾がズク〳〵なんでげす。』

『仕方がない、車へ乘せてやつてくれ、お前は何所か此邊に、知つた家はないかね？』

『ねへこともありませんが、つい此先きに、茶店が一軒ありますから、其店へでも參りませうかねへ。』

『ウム、それが好からう、俺が灯提を持つてやるからお前巧く乗せてやりな、』
と、紳士は車夫に命じて『さあ、遠慮はないからお乗りなさい、如何いふ理由か知らないですが、事情によつては及ばずながらお力にもなりませう。』
と、灯提の光輝で秋子の顔を透すやうにした、秋子は耻かしさうに、益々首を俛首けて、
『有難うございますが、萬望お見逃し下さいませ。』
『イヤ、然ういふことを言ふのが、仰も心得違ひだ、人間什麼ことがあつても死ぬるつてことはない、若し又名譽に關すると思つてだつたら、何所までも秘密を守ります、兎に角、一緒に其所まで行らつしやい、悠圖々々して居て

警官にでも見付らうものなら、それこそ表向きになつて事が面倒だ。』
と、紳士はどこまで、穏やかに理を釋いた。成程警官にでも見咎められやうものなら、事が表向きになつて、新聞に書き立てられぬとも限らぬ。秋子はそれに大なる恐怖を感じて仕方なく立ち上つたが、弗と灯提の光輝で紳士の顔を見て、思はずアッと叫けんで後方へ蹌踉いた。
紳士も同じく驚いて、
『オ、、貴女は、秋子さんぢやありませんか？。』
と、聲を顫はして呼びかけた。

〔十四〕

紳士の顔を一目見て、秋子がアッと驚いたのも無理はない、此紳士こそは、今より十八年前、互に愛し愛されて、人目を避けて忍び合つた今井憲二なのである。

秋子は後方へ蹌踉めいて危く倒れんとしたのを車夫に支へられて、全身を顫はせながら、辛くも踏み止まつた『し、しばらくでございました。』と、腹の底から絞り出すやうな悲痛な聲。

『暫らくでしたねへ、此所で秋子さんに逢ふとは知らなかつた。』と、憲二は如

何にも感慨に堪へぬといふ調子、

『お耻かしふございます。』

『イヤ、決して、那麼ことはありません、計らずも貴女の危急をお救ひするといふのも、何かの因縁でせう、僕は、貴女のお父様には少なからぬ恩義を受けましたが、その恩を仇に返へして、以來は一寸もお尋ねもしませんでしたが、好く事情を承はりました上で、及ばずながら、出來得るかぎり、お力になりませう、その後お父様は、相變らず御壯健ですか。』

『はい、父は……。』

と、秋子は慌てゝ袂を顔に押しあてた。

『お父様は如何かなさいましたか。』

『平常から短氣な性質ですから、じ、自害したかも知れません。』

『エー、ど、如何いふ譯で、如何いふ譯で自害なさるのですか、今何所に居らつしやるのですか！、早く、お父様の所へお連れ下さい、さあ秋子さん、早く！。』

『今井さん、妾最う父の所へは參られません。』と、秋子は悚へかねて、聲を放つて咽び泣いた。

『何故ですか、何故行けないのですか。』

『今井さん、妾の古い罪惡は、父を殺し、他人の家名にきずつけました、迚も

迚も妾、生きて居られないのでございます、お放し下さいませ。』

と、秋子は又もや濱の方へ走らうとした。

『どつこい。』と、車夫は抱き止めた。

『その事なら、貴女よりも、僕はお父様に對して、何とも申譯がありません、假令どのやうなお叱りがあらうとも、斯う聞いた以上、打ち捨てゝは置けませんから、僕は秋子さん、お父様の御様子を見に參ります、一體何所に行らつしやるのですか。』

『あの……。』と、秋子は言ひかけて、咽喉でグッと聲を殺して『あのお園、お前此お方を、御別莊までお連れ申してねへ。』

『はい。』

『では早く、車夫、お前は此人に過失がないやうに、頼むぞ。』と、憲二は慌てゝ駈け出さうとした。

『イエ、妾は、最う誰何にもお顔を合はせることか出來ないのですから。』と、秋子は車夫の手を振り切つて、濱邊を差して走り出した。

『やアー。』と、車夫は驚いて直ぐ捕へた『旦那、私も一人ぢや困りましたな。』と、そろ〳〵弱音を吹き出した。胡麽ことで手間取つて、一體幾等になるのかといふ胸算用もあるのだ。

『仕様がないねへ。秋子さん、貴女は何故さう解らないのです、お父様の、危急存亡の時ぢやありませんか。』

『でも、妾、生きて居られない、苦しい境遇なのですから、萬望お察し下さいませ。』

『困るねへ、貴方が生きて居られないよりも、此今井憲二が、お父様に御面會する苦痛をお察し下さい、迚も、合された義理はないのですが、危急の場合と聞いては、愚圖々々躊躇はして居られません。胡麽ことを言つてる内も、實は心元ないですから、では車夫、先刻言つたその茶店へでも大急ぎで連れて行つてくれ。』

『へェ。』

『早くしろ〳〵。』

『へエ。』と、車夫は頗る不機嫌な面で、乘らじと拒む秋子を抱へて、俵でも積むやうに邪慳に車へ抱き上げた。

『何方だね。』と、憲二は自から灯提を持つて、道を照らしながら先きに立て走つた。お園も裾を攝げて俥の後方から走る、俥上の秋子は左右の袂を顔に押しあてゝ、苦しさうにすゝり上げて居た。

間もなく車夫は『旦那、此家です〳〵。』と、先きの憲二を呼び止めて、右側の古めかしい茶店の前に立ち停つた。憲二も氣を注けて居たのであるが、店が薄暗いのでつい見落したのである。

『ウム、此家か。』と、憲二は直ぐ家へ這入つた。草葺の古い屋根裏や梁に、煤が總のやうに滿邊なく下つて居る廣い土間の家であつた。

跫音を聞いて、奥から婆さんが出て來た。

『入來つしやいませ。』

と、拍子を取りながら土間に下りて、細目にしてあつた店の洋燈を少しかき立てた。

憲二は此不景氣さうな樣子を見て、聊か失望したやうな顔をしたが『婆さん濟まないがね、女の着物を一枚貸して吳れないか、お禮は幾等でもする、少し譯があつて、全部濡してしまつたんだ。』と早口に言つて『オイ車夫、早く

下してくれ！。』

と、命じた。

『へエ。』と、車屋は揖棒を下して、狂人のやうに頭髪拂り亂した秋子を抱き下し、お園と左右から手を取つて、茶店の土間へ引き入れた。グショ濡れになつた裾へ、砂が塗れ付いて居るので、如何にも見窶らしく見へた。

『オヤまあ、これは大邊でございますねへ。』と、婆さんは秋子の側へ寄つて、濡れた褄に觸つて見て、見るともなく顔を見合せたが、忽ち愕然として『貴女樣は……。』

と、腰を拔さんばかりに打ち驚いた。

秋子もひよいと婆さんを見て『アッ』と魂消るやうに呻いて、思はず後方へ蹌踉いた。

此婆さんは卽ちお近婆さんだつたのである。憲二を始め車夫もお園も、此有樣には少なからず驚いた。期せずして二女を取り圍んだまゝ、眤と顔を見較べて、暫らく言葉はなかつた。

『貴女樣はまア、如何遊ばしたのでございます。』

『婆や、色々と譯があつてねへ、滋子のことを、萬望ねへ。』と、秋子はお近さんの手を確固と握りしめた。

『はい〳〵、それは最う貴女樣、妾の目の黑い內は、決して不自由はさせませ

ん、したが、まあ貴女様は一體如何遊ばしたのでございます、若しやあのやうなお手紙を差し上げたゝめ、お殿様のお耳へでも這入つて……。』と、お近婆さんは最う涙を流すのであつた。

『イヽエ、然ういふ譯ではないが、犯した罪は、何日か我身にかへるのよ。』

『エッ、では矢張りその事で……奥様、申譯がございません。』と、終にお近婆さんは、オイ〳〵聲を揭げて泣き出した。奥で樣子を聞いて居た滋子は、それと知つて飛び出して來た。

『奥樣、申譯がございません、飛んだことになりましたわねへ、お許し下さいませ。』

と、婆さんと一緒に土間へ蹲いて、片手で顏を覆ひながら、片手で執固と秋子の膝に抱きついた。

『オヽお滋や、お前が止めるを聞かないで、無理に書かせた私が惡るかつたのぢや、私が惡かつたのぢや、奥樣、その、申譯に……』と、お近は涙ながら血相かへて立ち上つた。

『イヽエ、さうぢやありません、決して、あの手紙のためぢやありません』と、秋子は擬乎とお近婆さんの手を執つて『今云ふ通り、自分の犯した罪は、何日か我身に歸るのですよ、滋子や、お前は胡麽者を母に持つて、嘸ぞお怨みだらうねへ、免しておくれ。』と、見得も外聞も打ち忘れて、ワッと聲を揭げて

泣き悶へた。

『お母様、那麽、那麽ことございませんわ、勿體のうございますわ。』

『滋子。』

『はい。』と、母娘は犇と手を取り交した。十八年といふ間、嘗て一度も母と呼び娘と呼ばれたことのない母娘が、爭はれぬ血族といふ神秘的の力に誘はれて茲に再會することを得たのである。神の力でなければ及ぶ譯のものではない。

憲二は樣子あり氣な三人の態度を、先刻から眤と瞶めて居たが『秋子さん、では此娘が、若しあの時の子ぢやありませんか。』

『はい。』と、秋子は思ひ出したやうに憲二を見上げて『滋子や、これが、これ

がお前のお父さんですよ。』

と、憲二の方へ押しやつた。

『オヽ。』と、憲二は、おびへたやうに呻いて滋子の手を攫んで、不覺の涙を拳で拂つた。

お近婆さんを始め一同は、重ね〳〵の奇遇に夢かとばかり打ち驚いた。

〔十五〕

黑澤正直が一刀をおッ取つて、血相かへて芝の我家を飛び出すと、及ばぬまでもと增代が踵を追ひ、三十分ばかり經つて歸つて來た伜の正隆も、妻から樣

子を聞いて直ぐ羽田へ向つた。

そして、一足違ひに御門子爵の別荘へかけ付けたが、遲かりし、その時は既に正直は咽喉佛を搔き斬つて、四邊は一面の唐紅。正直は虫の息になつて呻き苦しんで居た。

子爵家では家令の金之進を始め、下女下男が上を下への大騒ぎ、本邸へ電報を打つやら警察署へ届けるやら、最寄の醫者を呼んで手當をさせるやら、實に此上もない迷惑である。

苦しい息をはずませて駈け付けた增代と正隆は、手負の正直の左右から差し覗いて、

『何てまあ良人は……。』

と、增代は道が恐ろしい有樣に氣をのまれて、泣くより外に手も出し得なかつた。

『お父樣、正隆でございます、貴方は飛んだことをしてくれましたねへ。』と、正隆とても同樣である。

『オ、、增代、正隆、ぶ、武士の名折れぢや、かゝ、刀を出せ』と、正直は苦みながらも、まだ氣强く自殺を果たさうと焦慮つた。動く度に、口を訊く度に咽喉の負傷から赤黑い血糊が、滾々として流れ出た。

『飛んでもない、お父樣、此所で自殺なすつては、子爵家の御迷惑ぢやありま

せんか、さあ傷は淺うございますから、氣を確かに持つて下さい。」

『秋子は、秋子は如何したか。』

『はい、姉さんは僕が、引き取ります。』

『オヽ、然うしてくれるか、秋子には罪がない、私が皆惡かつたのぢや、子爵に、お前から、好く、好くお詫びしてくれ。』と、正直は自分の頑固に少しは心附いたと見へて、心の底から悔いたらしかつた。人の正に死なんとする時、その言ふことや必ず善哉——とは全く事實である。

『はい、それは、決してお氣遣ひ下さいますな。』と、正隆は堅く受合つて、それよりも父への手當を急いで、慌てゝ傍の醫者に『濟みませんが、お宅へ連

れて參りますから、早く、お手當を願ひます、如何でせう此負傷で……』と、頗る心細い顏をした。

『さうですねへ。』と、醫者は疑問らしく言つたが、目の働きに依つて察するに迚も助からないと斷言したらしかつた、正隆はひやりとして落膽したが、出來得るかぎり手を盡さなければならぬと思つて、

『兎に角、連れて參りませう、萬望、擔荷がございましたら……。』と、家令の金之進に相談したが、素より那麽物の準備はなかつたので、夜ではあり近い所だから、戸板で急造の擔荷らしい事を造つて、人々の手を借りて醫師の家まで運び込んだ、その時には正直翁は言をいふ氣力もなく、昏々として人事不省に

陷つて居た。

傷所には、たゝ繃帶を卷いた上に卷いたばかりで、醫者は之れといふほどの手當をしなかつた。尤も專門の外科醫でなかつたからでもあるが、又、手當をしても本人を餘計に苦しませるのみで迚も助かる見込はなかつた、正隆も增代も、たゝ正直の枕邊につききつて、今か今かと、臨終の一息を待つばかりであつた。

そこへ息せききつて、駈け付けて來たのは、秋子と憲二と滋子の三人であつた。憲二が子爵家へ駈け付けて、樣子を逐一聞いた上、秋子にも滋子にも、臨終の正直翁に逢はせてやろうと思つて、直ぐ茶店へ引き返へして連れて來たの

であつた。

三人は看護婦に導かれて、襖の外まで來たが、害内には這入り得ないで、ピッタリ其所へ平伏してしまつた。

『僕は、先年不埒を動きました今井憲二でございます』と、窮屈な洋服の膝に兩手を置いて、熱い涙をハラ〳〵と流した。

『オ、、今井君か。』

と、正隆は思はず振ぢ向いた。增代は驚きは同じである。

『秋子、好く、好く無事で居ておくれた。さあ此方へお這入り、滋子も好くお出でだねへ、お祖父さんは、こ、此の通りになりました。』と、增代はハラハ

ラと涙を流した。

『申譯がございません。』と、秋子は死ぬに死なれなかつた悲しさを、茲で又ワッと泣くのであつた。

『サア〳〵、早く這入つて、お父様を見ておくれ、さあ今井さん。』

『はい、イヽエ不埒を働いた私共が、茲まで參るのも無禮でございますのに、お近付き申しましては、却つて……。』

と、今井は恐れ入つた。

『イヽエ、良人も、自分の頑固に氣がついてゐへ、先刻も秋子のことをゐへ。』

『エヽヲ。』と、秋子は思はずにぢり出た。

『正隆に、正隆に賴むと仰有つたわね。』

『エヽ、此、此不孝者を……』と、秋子は又ひた泣さに泣き入つた。

正隆は一同の堪へがたい悲しみを、遮るやうに父の枕邊に寄り添ふた、氷囊に手を持へ添へて『お父様、お父様』と、五六度操り返へして呼んだ、人事不省に陷つて、此儘朝まではもつまいと言ふ醫者の言葉であつたが、不思儀や正隆の聲が通じたと見へて、夢のやうな目を見開いた。正隆はソッと襖の外の三人を手招いて『お父様、姉さんが參りましたよ。』

正直は不審さうに、正隆の顏を見詰めて、考へるやうにして居たが、秋子が顏を恐る〳〵覗くと、同じく暫らく瞶めて『秋子か。』と、聞き取れないやうに

呻いた。

『はい。』

『小父様。』

と、憲二も秋子と相對して、眤と顔をさし覗いたが、正直は同じく何か言はふとして、思ふやうに聲が出なかつたので、口を二三度なめづつた。

正隆はこれは變だと思つて『お父様、お氣を確かに持つて下さい、此所に居る娘は、貴方のためにはたつた一人の孫ですよ。』と、耳に口を寄せるやうにして言つたが、正直はそのまゝ目を閉ぢて、終に不歸の客となつたのである。

● ● ● ●

その後お近と滋子は、黒澤家の出資で、伊皿子の賑やかな通りに、立派な煙草屋を出させてもらひ、秋子も其家に起き伏しゝて居たが、今井憲二もまだ無妻だつたので、二人は芽出度く結婚して、伊皿子の煙草屋を引き拂ひ、滋子もお近婆さんも共に今井家へ引き取られた。

秋子の身にも、滋子の身にも、温かい春が來た。

忘れ子 終

大正七年一月四日印刷
大正七年一月廿日發行

—忘れ子—
著者 頻冠者

京橋區木挽町二丁目十三番地
印刷者 新井由藏

東京市京橋區本材木町三丁目廿番地
發行者 服部喜太郎

東京市京橋區本材木町三丁目廿番地
發行所 求光閣書店
電話京橋二二九番
振替口座一六〇九番

不許複製

定價廿五錢

目錄御入用の方は往復はがきにて

うき世

□頬冠者著□

波瀾重疊、事件頻出、一瞬も靜止せざる現世の縮寫畫たる本書……

儘にならぬはうき世の常とは云ひながら、恰かも黄金の中に生れた義興が、一度事業に手を染めるや、急轉直下！家産を傾け盡し味氣なき浮世の浪に揉れ〳〵て終に愛孃吉野を賣らんとす。吁！親の心中や如何？娘の悲哀や如何？吁！運命の渦に流れ行く薄命の親子よ

不可抗なる浮世の潮流に漂よひ行く愛らしき浮草の樣な美女の生涯を見ずや……

東京求光閣發行
定價廿五錢・送料四錢
美極帧裝・版 六三
入繪口・頁〇四百二

春の歌

□天野星園會心の作□

妖艶極まりなき新らしき女の色彩濃き生涯を見ずや？

若々しい鶯の音が梅の梢を傳ふ樣に春を知り初めた若い女は希望と光明と理想と憧憬に張り切つて居る。青春の血潮の狂ふまゝに歡樂に醉ふた女優多摩子は、問題に問題を惹き起して終に自から其の渦中に苦しむ。彼女の爲めに良人の愛を奪はれた若い妻や、飜弄せられし有爲の青年の懊惱は如何ばかりぞや？、妖艶なる女優多摩子を中心として色彩豊たけき現代を背景に描ける曲折無限の作品也。

本能中心主義なる苦き女の慘たる終局を……

東京求光閣刊行
定價廿五錢・送料四錢
美極帧裝・判 六三
入繪口・頁二十九百